
戦艦越後物語・改

陸奥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦艦越後物語・改

【Nコード】

N6645F

【作者名】

陸奥

【あらすじ】

1941年4月 本州と北海道を隔てる津軽海峡を航行中の輸送船から、巨大な軍艦を発見したという報告が大湊に入った。付近に航行中の軍艦はなく、直ちに大湊航空隊から確認のための偵察機が発進し目標との接触を試みるが……果たしてそこに存在したものは？本作品には架空戦記小説には不要と思われる要素が多数存在し（恋愛、ギャグなど）、あらゆるネタや設定がごちゃ混ぜ……某所の言葉を借りると、炭火牛すき焼き丼・ブルゴーニュ風なものですので、それを割り切れるという方のみ御覧下さい。本作品は、

黒鉄大和先生著の『艦魂年代史シリーズ』のif作品となります。

序章 『 』 の終焉 『 』

20XX年、日本の主要四島の内もつとも北に位置する島、北海道。そんな北の地の道南地方、函館市のとあるバス停にその青年はいた。青年の名は『駒場翔』こまばかける、普通の高校生である。

本当は昭和に生まれてきたのではないかと周りから言われるほど好みが古く、妙なところで頑固な性格をした青年だった。

そして今日は12月24日、そう世間一般で言うクリスマス・イブの真つ只中だ。翔の友人は恋人がいるものは共に過ごす予定の者が大半であり、学校から出るまでの間も廊下などでそういつたカップルと思われる仲睦まじい男女の姿があつたが、本人にはそういつた話は一切なかつた……いや、幼馴染みの女性が一人おり、よく話したり出かけたたりもするために微妙に噂になつたことはあるが、翔にとつての彼女は親友であると同時に恐怖の対象でもあるためマンガのような幼馴染みの関係になることは多分ないだろうと思つてる。

普段から浮いた話があまりなく堅物扱いされているが、本人は積極的に行動していると思つている始末だからまつたくもつて手に負えない青年である。

その為、自覚のない翔はこの日が来なければいいと常日頃から思つていたのではあるが時を止めるような力もない翔が望んだところで時間が止まるわけもなく、とうとう来てしまつたのだつた……。

朝から吹き荒む猛吹雪……視界は10mから15mがせいぜいだ。そんな天候でも自転車が禁止になつている冬期間、俺はバスを待ち続けなければならぬ。例えばそれが交通渋滞や安全のためにバスが低速で運転するせいで30分……最悪の場合は1時間遅れになつても、だ。

函館には市電もあるだろう、だって？路線がたくさんあった昔ならいざ知らず、今の市電は市内のごく限られた路線しか走っていないために俺達の家はバスに乗るか、歩いて帰るしかないのである…
…そう、俺達だ。

隣には幼馴染みであり、代々武術家である家系に生まれ、今はマフラーと耳当てとフードで顔の半分が見えないが、凍水垂らしながら自分のコートの上に俺のコートを重ね着している鶴崎淑恵つひのきしゅえ17歳が震えて立っている、おかげで俺はコートなしで学ランだけの状態で吹雪に耐えねばならない。

……やたらと長くなってしまったが、要するに俺が言いたいのはそこまで着込んでいるのにまだ震えるくらい寒いのかということだ。「お前な、そこまで厚着して……あまつさえ、俺のコートまで着込んでおいてまだ寒いのか？あと凍水拭け」

「……翔、常々思っていたんだけどもう少し女性に対してのデリカシーというものを……ふ、ふあ……くしゅ！」
「あゝわかったわかった。取りあえずティッシュやるから、凍をかめ」

隣で淑恵が渡されたティッシュで凍をかんでいる内に、バスがやっと来たようだ。

いろいろと文句をたれている淑恵を無視して、俺はバスに乗り込んだ。だって寒いんだもの。

こんばんは、駒場翔です。

現在自分は、先ほど家に帰ってきたばかりですが再び猛吹雪の中を歩いております。

そんな最悪の天候の中、何故また外にいるのかというと、
『ケーキの材料、買い忘れてきたのがあったからちよっとひとつ走り行ってきたくない？』

という母の一声のせいに他なりません。吹雪も弱くなっていたので愚かにも引き受けてしまった俺は、十数分後には再び猛威を振る

い始めた吹雪の中でひたすら後悔していた。

（ああまったく、何でよりもよって今日に限って俺は引き受けたんだ……そうだ、今日は厄日に違いない！）

「っと、すみません……あれ？」

と、心中で愚痴をこぼしていた俺は、前から歩いてきたフードを深くかぶった女性にも気付かず肩がぶつかってしまった。すぐに謝って後ろを振り返ったが不思議なことどこにも女性の姿は見えず、俺は疑問に思い首を傾げたが更に強くなってきた吹雪に慌てて意識を移し、顔を覆って走り始めた。

（こりゃ酷いな……早く買って帰ろう。そしてあつたか〜いこたつで蜜柑を食おう）

と、家に帰ってからの暖かいこたつの中を思い浮かべ顔を緩めたその瞬間。

スリップした大型クレーン車の車体が見えたと同時に眩しいライトを感じた瞬間、身体に強い衝撃を感じたのを最後に俺の意識は途切れた。

クレーン車は橋の上から川へと前半分がせり出し、後続の乗用車数台が玉突き事故を起こすというを大事故へと発展。すぐさま警察と消防が現場に駆けつけたが翔が事故の現場にいたということを見ていた目撃者がいなかったことから、翌日の両親からの搜索願が出されるまで翔が事故に巻き込まれたということを知るものは誰一人としていなかった。

……事故が起こった直後の現場に彼女はいた。視界が10m足らずしか見えないほどの吹雪の中、強風にあおられ一瞬だけ垣間見えた彼女の口元は静かに笑っているようにも見える。どこまでも普通の、しかしどこか気味が悪くなるような笑みを浮かべて……彼女の

姿を見た者は、誰一人いない。

序章 『 の終焉』 (後書き)

皆さんはじめまして、前にあったことのある方はお久しぶりです。陸奥です。

今回、やっと改訂版が出来上がりましたので掲載いたします。

その第一陣となる序章から既に前回とは大きく異なっております。まず、

- ・ 翔を轢いた車両 前回、トラック 今回、大型クレーン車
- ・ 凍垂れ寒がり幼馴染み登場
- ・ 謎の女性登場

……等です。

これからもいろいろな矛盾や、ご都合主義的な展開になってしまいかもしれませんが、出来る限りリアルな戦記っぽいものにしていきたいと思えます。

ちなみにこの作品は、戦記には不要と思われるような要素も多々あるためにジャンルを戦記とはせず、その他に設定いたしました。

第一章・『濃霧の中より来たる艦』

時に、歴史というのはありとあらゆる可能性が微妙なバランスで積み重なって作られてきたのだと思う。太平洋戦争を例にして考えてみることにしよう。

真珠湾奇襲の成功、絶対優勢なミッドウェイでの連合艦隊の敗退、そしてレイテ海戦における栗田艦隊の謎の反転……。

どれもがどこか少し違うだけで後の結果が変わっていたであろう戦いだ。

例えば、南雲艦隊が奇襲直前に発見されてしまった、ミッドウェイで先に敵艦隊へ向け攻撃隊を発進させた、栗田中将が重巡『愛宕』と運命を共にしてしまった、又は潜水艦の雷撃を受けなかった等々、確実に後の展開は変わっていただろう。

ならば、その数ある可能性の中に途中で余計な何かを加えてみたらその後はどうなるか？誰でも一回は想像したことがあるだろう……この物語は、そんな余計なナニカが加わった物語……。

「何でこんなことになってるんだ……？」

「長官、僭越ながら申し上げさせていただきます……この戦争で日本は確かに得たものも多かったでしょう、しかし同時に、失ったものもまた多すぎました」

「戦わざれば亡国、戦うもまた亡国につながるやもしれぬ……。しかし、戦わずして国亡びた場合は魂まで失った真の亡国である！」

「可能ならば……第一航空艦隊への、編入をお願いいたします」

史実とは異なった別の歴史になるか、それともまた別の可能性と共に消え去り結果は変わらないのか、結果が更に酷くなるのか……。そんな余計な可能性になった一隻の艦ふねの存在は、物語を少しずつ違う方向へと導いていく。

「姉さんにはわかりません、わかるはずがないんです！」

「貴様……今、何と言った？」

「俺は、絶対に諦めないぞ！」

「変えられるかどうかの問題じゃない……変えるんだ、歴史をな」

「本日付で戦艦『越後』艦長として着任いたします！」

出会うはずのなかった運命、交差する数々の想いを載せて艦は錨をあげ動き出す。

第一章 『濃霧の中より来たる艦』

「俺は……私は、一体何者なんだろう……」

「あなたがたとえ何者であろうとも、あなたという存在に変わりはない。そうでしょう？」

「翔……目を、覚ませ。覚ましてくれ……」

晴れることのない歴史という濃霧の中を、艦はただひたすら前へと進んでいく……。

第一章 第一節・『Hello World』

この日、津軽海峡の天候は晴れ……の筈だった。筈だったのだが……、
「晴れませんねえ、この霧」

「予報では快晴となっていたが……当てにならない予報だな。見張りに周囲への警戒を怠らないよう、注意してくれ」

青函連絡船『飛鸞丸』は、濃霧の中を航行していた。函館港を出港して2時間、最初の1時間半ほどは順調な航海が続くと思いきや突然発生した深い霧に呑み込まれたしまい、視界がまったくきかなくなってしまうた。

『飛鸞丸』船長、吉川巖よしかわいわおと副長、田所宏平たどころへいは航行した時間と速力、方位などから針路を割り出し、僅か数ノットの速度で周りに気を配りながら慎重な航海を続けていた。なにせここは海峡のど真ん中、航路が設定されているとはいえこの濃霧だ。航路を外れた船が出てもおかしくはない、何せ自分たちも正しく航行できているかなどわからないのだから。

そうして盲目航海を続けていた『飛鸞丸』ではあるが、霧の中にうつすらと影が船の前方に浮かび上がった。

「おい、あれは……」

「船、でしょうか……」

徐々に近づいてくる影に、二人は一瞬間の間に考える。もし航路を外れて陸地だった場合は進路を急ぎ変えなければ、座礁してしまうがここはまだ津軽海峡のど真ん中、陸地などあるはずがない。

「面舵いっぱいだ、急げ！」

「面舵いっぱいヨソ口！」

舵をきり左舷に若干傾斜しながら『飛鸞丸』は旋回して進路を変え。しかし件の船と思われる影の位置がいつまでたっても変わらない。まさか向こうもこちらに舵をきっているのか、それとも……

あちらがあまりに大きいため徐々にしか動いていないように見える、ということか？だとするとまだかなりの距離が離れているということになる。

「田所君、正面のあれはもしや、海軍さんの軍艦……しかも戦艦ではないかね？」

「おそらくそうではないでしょうか……船長、霧が」
「晴れてきた、な……どれ、だんだん見えてきたぞ」

その時、吉川船長は何か違和感を感じた。

どれだけ近づいていても距離が縮まったように見えない。相当な大きさであっても、双方が動いているのだからもう少し縮まったように見えてもいいはずだ。ということは……動いて、いないのではないか？

そして『飛鷹丸』が戦艦と思われる船に対して、後方から6、000mの距離で追い越す時、今度は双眼鏡でその艦を眺めていた田所副長が異変に気づいた。煙突から排煙が見えず、完全に火を落としているようなのだ。しかも甲板に人の気配がまったく感じられない、ということはなんらかの極秘任務で停泊しているのか……あるいは、

「船長、大湊に連絡しましょう」

「どうした、何か変なことでもあったのか？」

「……どこにも、軍艦旗や国旗が掲揚されていません」

米英蘇豪中の戦艦が領海を侵犯しているのか。

「通信士、大湊要港部に打電。電文は『発、日本国有鉄道『飛鷹丸』、宛、大湊要港部、本文『津軽海峡を航行中、函館より方位253度、距離約20kmの海域にて、国籍不明の戦艦と思しき艦が、停泊または漂流中。我に対処手段なし、早急な対応を求む』以上！船橋より機関室、両舷前進一杯！急げ！」

『両舷前進一杯、ヨーソロ！』

機関が唸りをあげて回転数を増す。『飛鷹丸』はその場から逃げようように最大速力の17ノットで遠ざかっていった。

時に、昭和16年4月1日。大湊要港部に1通の緊急電が届いた。電文は、『津軽海峡を正体不明の戦艦と思しき艦が漂流している』
函館から出航した国鉄所属の鉄道輸送船『飛鷹丸』から伝えられたこの緊急電に、大湊要港部は大湊海軍航空隊へ哨戒機の発進を要請する。

これを受け大湊海軍航空隊司令、井上左馬二中佐は直ちに出撃を命じ、大湊飛行場から九六式陸攻2機が発進した。この日の津軽海峡は昨夜から発生していた濃霧のため見通しが悪かったが、緊急事態につき選りすぐられたベテランに出撃が命じられることとなった。

「目標は、正体不明の戦艦と思しき艦だ。貴様たちの任務はこれを確認後、直ちに詳細を連絡することである。なお、当該艦はこちらに対し発砲の恐れがある、十分注意してくれ。発進時刻は〇九三五の予定だ。以上、解散」

連絡を受けた直後から、大湊飛行場では九六式陸攻に給油、整備、25番爆弾の取付、弾薬の補充を行っており発進までの準備をあと少しで終わる予定だった。

「しかし、国籍不明の戦艦とはな。アメリカからソビエトに向かうにしろ、ソビエトからアメリカに向かうにしろ、あんな海域で停まっているなんて機関に故障でも起きたのかね？」

「さあ……どのような理由にしてもあの海峡は我が国の領海です。いくら国際海峡であるにしても、事前通達くらいは行うはずですが、しかし今回はそういった話ほとんど耳にしません」

「……ま、要は実際に乗り込んでみなきゃ何もわからんってことだな」

出撃する2機のうちの1機、九六式陸攻二三型オミ-314号機の機長山岡慎之介中尉は、出撃前の飛行長からの訓示の後、最終確

認を終えた機体に乗り込み副操縦士、澤井孝昭上飛曹とともに出撃の時を待っていた。他の5人の搭乗員も、すでに各自の持ち場に着いている。

やがてオミ-314号機は2基の『金星』発動機の轟音を響かせながら、ゆっくりと滑走路端に停止する。

「一番二番出力最大、発進！」

轟ツ！と、爆音をさらに大きく、力強くしながら『金星』はオミ-314号機の機体を動かしはじめる。

やがて加速したオミ-314号機は、ゆっくりと大空にその身を浮かべた……。

「機長より達する、まもなく目標上空に到達するが何が起こるかからん…各員、気を引き締めていけよ」

真剣な顔で山岡中尉は搭乗員たちに伝声管を使って注意を促す。

途中まで雲上を飛行していた九六式陸攻も、高度を落としたため機体の周囲はすでに霧に囲まれており、今は計器に頼って飛行するいわゆる“計器飛行”の状態だ。

目標の周辺は晴れていることだが、この状況ではそれも怪しい。最悪、目標との接触はできないかもしれないがこの状況では仕方がないとも言える。

だが、そんな不安も杞憂に終わったようだ。目標まで後1kmまでの距離に迫った途端に、今まで機体を包んでいた濃霧が嘘のように晴れたのだ。

「機長！あれが目標では？」

「おお、あれか……確かに大きいな、水雷艇がまるで解だ」

そばで様子を見ているのだろう、水雷艇がすでに到着して目標艦の周囲に停泊しているようだ。

しかし、近づくとつれその認識は間違いだということに気づいていく。

「ちょっと待て……あれは水雷艇なんかじゃない、駆逐艦だぞ」

そう、傍らに停泊している艦はよくよく見てみると駆逐艦だ。前後には背負い式に連装砲が3基搭載され、煙突が2本あり魚雷発射管が2、3基。この兵装の配置から『吹雪』型、『朝潮』型、『陽炎』型のいずれかだろうと推測できる。だが全長はいずれも120m近くにまでなる大型の駆逐艦で、間違っても8、90m近くの水雷艇なんかとは見間違えるはずがない。それほど、そばにいる比較対象である目標艦が巨大であるということなのか……。

艦後部には、飛行甲板のようなV字状の平坦な甲板が見え、例えるなら英国の『フューリアス』の改装前の姿を前後逆にしたような印象を受ける。人影はなく、排煙もなければ、発砲もない。

周囲を3周ほど旋回し、安全を確認した後に山岡機長は機をさらに艦に近付け、発見してから実に15分後に大湊要港部に発見の電文を打電させた。

（いったただつきまぐずうツ!?）

目の前には沢山の寿司、そして箸には大好物の中トロの刺身。俺、駒場翔はその大好物が口に入る瞬間、何か堅いものに頭をぶつけて目覚めた。

（なんだ夢か……。やれやれ、寝ぼけて机の角にでもぶつけたか?）
と思いつつ目を開け、寝転がったまま……。いや、ゆったりとした椅子に座ったまま周囲を見るとそこは見知らぬ、なんだか高級そうな部屋……。今まで、こんな場所に入ったことはない。

（えっと……。昨日はどこで寝たんだっ……。!?）
そうだ、昨日はケーキの材料の買い出しに行って……。唐突に出てきたクレーン車に轢かれてそのまま意識を失ったんだっ。

……。しかしそうなると、ここは一体どこなのだろうか?病院に搬送されているのならベッドの上で呼吸器でもつけているだろうし、そもそも椅子に座らせてそのまま放置するはずない。

（もしかして、ここがいわゆるあの世ってやつか?それだったら随

よし落ち着こう、深呼吸三回、OK落ち着いた。

まず、状況を整理しよう……。

昨晚、俺はクレーン車に轢かれて目を覚ますとこの部屋の中にいた。次、その直後に変な頭痛に襲われ、なんとか治まったので立ち上がると何故か帝国海軍の軍服を着ていると。これはこれで問題だ、なにしろ轢かれたのと、この部屋にいる関連性が全く浮かんでこない。

しかし、いまはそれさえも些細な問題に思える。それは何故か？何で、何で女の身体になってるのさ……いや待て待て、もしかしたら風邪をひいて……そうだ、胸！まだ女性の身体と決めつけるのは時期尚、早とち……確認のために少しだけ前を開いてみたけど、明らかに女性特有の胸の谷間で、皮が身体と繋がってたよ……せめて偽物であつて欲しかった。

もう一方のほうは怖くてまだ見ていない、なんか変に感触がないような気がするけど気にしないこととしよう。

「何でこんなことになってるんだ？まあ今愚痴を言っても、元に戻るわけでもなし……まずは情報収集だな」

若干現実逃避をしつつ自分を宥め、とりあえずこの部屋から出ることにする。

しかし、出たところは通路。気を取り直してその先の扉をあけるが、やはり通路……。

「まさか、延々と続いてるわけじゃないよな……そうだ、あの階段から出られるかな？」

そう思って横にあった階段を上がった、のだが出口の扉が予想以上に重い。

やっこの思いで扉を開けると、そこは周囲に機関銃らしきものが多数設置された傾斜した場所だった。足場をさらに進むと傾斜は終わり、代わりに旧軍の高角砲や機関砲みたいなものが大量に設置さ

ですけど！？と思い、とつさに隣の洞爺大尉に助けを求めようと振り返るが期待を込めた視線で返されてしまった。

そうか……周りの人達と同じように他艦に乗り組んでいたのだと思われて、当たり前のように経験が豊富な士官だと思われているのか、安易に頭に湧き出る情報通りに喋ったちよつと前の俺を殴りに行きたい。

断れる雰囲気じゃないよなあ、と完全に周りの空気に飲まれつつひとまず頭に無理矢理詰め込まれたような知識の中から妥当と思える指示を出すことにする。

「……わかりました。これより私が臨時に艦の指揮を執ります。乗員等の掌握ができ次第、兵や下士官島は前部甲板に集合。非常時につき右舷最上甲板などに関係なく、です。今の状況を整理するためには情報が必要ですので、士官や准士官を艦首の錨鎖甲板に集合するよう通達してください」

「艦首錨鎖甲板ですか？」

「はい、皆さん正規の乗員ではないとのことですからまだどこがどこだか場所がわからないでしょうし」

ちなみに俺もわからない。

「了解しました、総員前部最上甲板集合及び、士官、准士官の艦首錨鎖甲板集合を伝えます」

ふう、ひとまずおかしなところはなかったらしい。その場で打ち上げたものとしては結構良いできなのではないだろうか。

「『武蔵』砲術科第七分隊第四機銃班集合！」

「『陸奥』砲術科第三分隊集合せよ！」

「『加賀』主計科集まれえー！」

「『霧島』砲術科第二分隊、集合整列！」

「『瑞鶴』第二高角砲班、総員集合！」

「『蒼龍』第五高角砲班整えーっ！」

「『筑摩』機関科集まれ！」

ここ、全部最上甲板は今、市場の喧噪の如く騒がしかった。優に三千人を超える人間がそれぞれの班へ整列するべく押し合いへし合いしているのだ。

想像してもらいたい。東京ドーム一面が満員電車のように混み合っているのを。広さは全然違うがイメージとしてはそんな感じだ。

そこへ……、

「艦内各部の士官に対し緊急連絡、繰り返す、艦内各部の幹部に対し緊急連絡！間もなく艦橋下右舷最上甲板に緊急の会合を開始することを達する、間もなく艦橋下右舷最上甲板において緊急の会合を開始する！幹部士官は直ちに艦橋下右舷最上甲板へ集合されたし！」この連絡が飛び交ったため、さらに甲板は混沌を極めることとなった。

そこかしこで士官と下士官、水兵がぶつかり合いなかなか前へ進めない状況となっていた。

一足先に洞爺大尉と艦首錨鎖甲板へ到着した俺はこれまでのことを思い返していた。にしても、風がきつくてちよつと寒いなあ……。（さつき頭の中に流れ込んできた情報の中に『越後』の艦魂ってたけど、やっぱりあの“艦魂”なのかねえ……）

先ほどの“艦魂”という単語の意味は一つしか思いつかない。

俺が読んでいたネット架空戦記にたまに出てきた萌え系のヒロイン、それこそが艦魂……ちなみに俺には萌えというのがどういったことかは未だにわからないけど。

……まあそれはさておき、すなわち『越後』は自分であり自分は『越後』であるということだ。艦が沈むときは、自分も死ぬ。

そう考えていて一つの仮説が浮かび上がった。艦の魂は皆、女性の姿をしていると言ひ伝えられているらしい。

だから自分が艦に憑依……だよな、したときに男ではなく女の姿

になったのではないだろうか。というか、そう考えないと他に理由が見つからないからそう考えたい、そうじゃなかったら他にどんな理由があるんだ。それこそシヨツカーによる魔改造か。

（しっかしさつきから『武蔵』だの『加賀』だの『陸奥』だの、もしかしなくてもこの艦の乗員つて寄せ集めか？こりやまずは戦闘訓練の前に艦内の構造把握が先かなあ……）

と、考え込んでいる内にいつの間にか幹部が集合していたらしい。「大佐、総員集合しました！」

と、早川中佐が知らせてくれた。

「ご苦労様です早川中佐。皆さんも良く集まってくれました、私は海軍大佐天霧楓といいます。以前は…『信濃』という戦艦に艦長として乗り組んでいました。それではまずは自己紹介といきましょうか、早川中佐からお願いします」

「は、わかりました……自分は元戦艦『土佐』乗り組みの早川秀次副長を務めておりました。海軍中佐であります、本艦には気づいたら乗っていたとしか言いようがなく」

さて、この後の各人は一体どういった艦からきているのか……大きな不安と若干の好奇心を抱えながら、俺は黙って聞いていた。

「……では、次は私が。名は菜野輝夜、大尉です。元々は重巡『蓬萊』乗り組でした。年齢は秘密でよろしいですね？」

菜野大尉を最後に自己紹介は終わった。中には色々とは勘ぐってしまうような自己紹介の人もいたな……。

「第日本帝国海軍第一航空艦隊通信参謀、海軍少佐草加拓海です」

いや……これは驚いた。何せ下手すると『越後』に原子爆弾積みかねないからな。

まあ、わかったことは士官は全員がほとんど、それぞれ別の艦に乗っていたということだ。

「……成る程。それでは次に、本艦の現在置かれている状況は？」
「はっ、まず本艦の内部の状況を報告させていただきます。艦名は各種書類から『越後』と判明、艦内乗員はそれぞれが他艦に乗り込んでいたという乗員ばかりで、正規の『越後』乗員は確認できませんでした。現在機関、電気系統は停止中。全ての武装が使用不能になっています」

草加少佐がそう報告してくれた。そういえば、なんでさつきから一部の方に睨まれてんだろ？

「艦の周辺の報告をします。現在本艦は漂流しており、現在の海域は不明なるも、日が暮れ次第天測にて割り出す予定です。また、右舷前方三〇〇に吹雪型駆逐艦を発見、信号を送りましたが未だ返答はありません。なお、駆逐艦も機関は稼働しておらず本艦と同様に漂流している模様です」

「報告します。現在九六式陸攻2機が上空で旋回中です。所属は不明！」

「人数集計が完了しました。本艦の現在の乗り組み人数、5393名です。大多数は帝国海軍軍人でしたが、一部には女性や他国の軍と思われる者、また民間人なども乗艦していました！」

結構人数が多いなって、まだ睨んできてるよあの人。というか寧ろ鋭くなってるし……。

「貴官は、渡井中尉でしたね……何をさつきからそんなに睨んでいるんですか？なんか、変なことでもやらかしたでしょうか？」

そう尋ねたのだが、渡井中尉はいつそう睨みを利かせながらこう言い放ったのだった。

「それ以前に、何故女が軍艦に乗っている！」

……ああ、そうか。確かにそうだが、そこまで考え周りを見回す。うん、乗員の1/3くらいは女性だ。

なんか変じゃないか……そうだ、なんで昭和期の軍艦に女性がこんなに乗っているんだよ、海上自衛隊よりももしかしなくても比率多くないか？

「中尉、何処が変なんだ？当たり前のことじゃないか」

あ、少佐さん……えっと名前は確か……。そう、横川さん。横川喜勝少佐だ。

戦艦『天城』航海科所属、確かこうだった。

「当たり前！？何処がです、少佐！何故女が軍人になっているのか疑問に思わないんですか？」

ま、当然の反応ではあるが……。待てよ、さっきから『土佐』だの『天城』だのって俺の知る日本にはどっちとも建造中止になって存在しないはずだ。

「おかしなことを言うやつだなあ。昔ならともかく、今は普通に乘っているじゃないか」

もしかして、早川中佐や横川少佐は別の歴史の人間で、あの中尉が俺の知っている歴史の方……。みたいない感じか？あ、なんか俺が考え込んでいる内に論議が白熱してきていたらしい。

もう少しで女性肯定派と否定派で取っ組み合いの喧嘩が始まるかと思われたまさにその時、全員に衝撃の報告が入る。

「報告、右舷三〇〇、艦影3、接近！速力約20ノット！」

次から次へと……。ここがどこだか、いや陸攻がいる時点で日本なのは確実だが、何時なのかもわからない状況での接近となると、最悪攻撃されるかもしれない。まずは相手がどれほどの戦力を持っているか確認しないと。

「艦種、知らせ！」

「はっ……軽巡1、水雷艇2です！」

その報告に、一同にホツとした空気が流れる。

成る程、ひとまず撃沈のおそれはない……。かな？ないたる多分。

「軽巡より、発光信号！「我、大日本帝国海軍第五艦隊所属軽巡洋艦『多摩』、貴艦の所属ヲ通告シ武装解除セヨ」とのことです！」

武装解除も何も無い気がするが、一応通達しておくか。

「前方の艦より返信、「我、戦艦『越後』、現在全武装使用不能ナリ」です！」

軽巡『多摩』艦長、新美和貴大佐はその回答に首を捻る。

「全武装が使用不能？あれだけの武装を搭載しておきながら全てが使用不能だというのか」

「甲板に多数の乗員の姿が見受けられます。おそらく、動かす兵員がないか、動かすために必要な動力がないのではないかと……」
航海長が前方の艦を双眼鏡で監察しながら推論を述べてきた。

見たところ甲板には押し合いへしあい状態で乗員たちが並んでおり、とても戦闘ができるような状態ではない。

「確かに、それならば納得もいくが……今は任務を先に済ませるとしよう、信号！「我が領海ニ立ち入りシ目的ハ何カ」！」

『多摩』から信号が発せられて数分後、『越後』から返信が届くがそれはさらに新美大佐らを困惑させるものだった。

「返信、「現在、本艦ノ乗員ニ現状ノ認識ガ出来テイル物ハ皆無。サレド、乗員ハホボ全テガ日本海軍軍人ト認ム。我、友軍ナリ」！」

現状認識が出来ていないというのはまことに不可解そのものであり、彼らは自分たちの手でこの津軽海峡へ来たのだから、この返答は非常に理解しがたいものだ。

「現状の認識が出来ていない、だと？やつら、頭でも狂っているのか……まあいい、本艦は本艦の任務を続行する、信号！「コレヨリ貴艦ヲ臨検ス」！」

「了解、「コレヨリ貴艦ヲ臨検ス」、送ります！」

（それにしても……なんだあの艦は。明らかに『長門』よりも大きく、後部の甲板はやけに広いようだ。艦首に菊の御紋があるからには恐らく我が帝国海軍の船なのだろうが……）

ここでいったん新身大佐は思考を打ち切り、乗員にこう達した。

「総員、警戒を厳にせよ！」

「球磨型軽巡より発光信号、「コレヨリ貴艦ヲ臨検ス」！」

「どうします、大佐」

「仕方ありません、まずは事態の把握が第一ですし臨検隊を受け入れましょう。……伝令、すみませんが「了解」と返電してください。それと早川中佐、甲板の兵にラツタルを降ろすよう指示をお願いします」

みんなに頼んではかりだな、俺。……なんか申し訳なくなってきた。

そんなことをやっている内に軽巡から派遣された内火艇が近づいてくる。これでやっとここが何処で、何時なのか知ることが出来るだろう。

もし、だ。……もし史実の日本で開戦前だったら、戦争回避も出来るんじゃないか？そう俺は思ったがすぐに首を振ってその甘い考えを打ち払った。

一体何を考えてるんだ。一介の大佐で、しかもこの時代の日本にはいないであろう女性軍人で艦魂なんだぞ……これは関係ないか？そつえば、ここにいる人達ってみんな俺の姿が見えてるのか？……見えてるんだらうな、さっきから普通に話してるし。

……夢なら今すぐ覚めてくれえ〜！

第一章 第一節・『Hello World』（後書き）

さあいよいよ本格的に始まりました、戦艦越後物語・改 です
が、この始まりまでは本当に多数の方々に助けていただきました。
本当にありがとうございます。これからよろしければご意見や
ご指摘などをいただければ幸いです。

今回は改訂前とはあまり変わっておりませんが、次回からは大幅
に変わります。キャラクタの性格などで大きな変更点などはありま
せんが、海軍や陸軍の行動は結構変えられたと思っております。

詳しくは次回投稿の二節をご覧ください。

では、改めましてご支援、ご援助していただいた幾多の方々にお
礼申し上げます。

次回の戦艦越後物語・改 もお楽しみに！

第一章 第二節・『陸奥灣へ』

幾つもの舷梯が上がってくる足音が聞こえる。『越後』は今、幹部全員が舷梯付近に集合し臨検隊を待っていた。

「総員、敬礼！」

臨検隊の指揮官と思われる青年士官が舷側の影から姿を表すのとほぼ同時に楓は号令をかけ、一斉に出迎えた士官達が敬礼する。相手もすばやく答礼した。

(……やはり訓練された兵隊さんは動きが違うな、つといけないいけない。今は目先のことに集中しないと)

そんなことを楓が考えている内に、臨検隊指揮官が名乗りをあげる。

「大日本帝国海軍巡洋艦『多摩』より、貴艦の臨検に派遣された海軍中尉、宇野智也であります。さっそくですが貴艦は何処の海軍所屬でしょうか？見たところ我が方の艦艇のようですが軍艦旗もあがっておりませんし、外人や女の姿が多数見受けられて……艦長はどこらにおられますか？」

大佐の階級章をつけている楓を無視して、隣の早川中佐に尋ねる宇野中尉に楓は少しムツとした。見かけだけとはいえ、やはり無視されるといふのは気持ちのいいことではない。

「暫定的な艦長は、隣におられる天霧楓大佐だ」

その返答にまた楓とは反対の方向を見る宇野中尉だったが、顔が引きつっているように見えるのは気のせいだろうか？

「……冗談ですよ、中佐？」

反対だと早川中佐に指摘されやっとなら楓の方を向く中尉、しかしその顔からは否定してくれという願いがひしひしと感じられる。

「こんな時に冗談を言つても？」

「……」

「……」

黙り込む双方。空気がだんだんと重たくなっていく中で状況を打開すべく、楓は口を開く。誰でもこの沈黙は嫌だろう。

「ええ、と……とりあえず挨拶を。戦艦『越後』臨時指揮官、海軍大佐天霧楓です。よろしく」

「……失礼いたしました、巡洋艦『多摩』より臨検のため参りました海軍中尉宇野智也であります。乗艦許可を求めます」

「乗艦を許可します。……それで先ほどの貴官の質問ですが本艦は言ってしまうほどの所属でもありません。乗員も他艦からの寄せ集めで正規の乗組員は一人もいませんでした。それと何故外人や女性が多乗艦しているかですが……元々我々は別々の艦に乗っていて気付いたらここにいた、という者達ばかりですので、詳しくは知りません」

(俺は違うけどな、何でこの身体になってしまったんだろう……)

楓は自身の境遇に疑問を抱きながらも、中尉の質問に現在分かっている範囲で答える。

しばらく考え込むように黙っていた中尉だったが、やがて口を開いた。しかし……、

「……納得はいきませんがわかりました、しかしながら我が軍は女性の乗艦は原則として禁じられております。ですから、速やかな女性乗員の退艦を求めます」

女性の姿をしているからか、完全に自分を見下している中尉の態度に軽く楓は目の前の男に殴りかかりたい衝動に駆られるがその気持ちはなんとか抑えて答えを返す。そもそも外見年齢はともかく実年齢からして相手の方が上だ。

「……申し訳ありませんが中尉、それはちと出来かねますね」

楓の一言が何故か意外だったようだ、中尉は酷く驚いた顔をしている。

「何故です？」

「まず一つめ、どこに降ろすんです。本艦の女性が占める割合は約5400人いる内の1/4に達します。中尉の軽巡『多摩』に載せ

ますか？それではまた同じ事の繰り返しですしあの艦には載せきれないでしょう。二つめ、共に同じ艦に乗っていたという男性乗組員もいることからそれらから反発が起こりこの問題がこじれる可能性がある。そして最後、貴官よりも上級の将校が多数いるにもかかわらず退艦させられる権限を貴官が持っているのかどうか疑わしい。以上の三つの理由です」

「し、しかしですね！」

(おいおい……まだ食い下がる気か？)

自身の主張が明らかに矛盾しているにもかかわらず食い下がろうとする……むしろ自分の、子供でも言えるような反論に対して何も言い返せない中尉に若干呆れながらも、楓は中尉とのもはや意味のないやり取りに対応した。

「……何、軍令部からの連絡だと？」

存外に早い軍令部の対応に、新美大佐は少々戸惑い気味に問い返した。

近々指示が来るだろうとは思ってはいたものの流石にここまで早い対応は少々予想していなかったのだ。

「はい、不審艦二隻を陸奥湾へ移動させそちらで詳しく調べる、との通達です」

「いつになく対応が早いな、今回は……よしわかった、派遣中の宇野中尉達へ通達。「臨検隊八即刻帰還せよ」、だ。同時に目標艦に通達しろ、「貴艦八陸奥湾へ移動スベシ、同湾マデ八本艦、及ビ水雷艇ガ同行ス、航行中ニ僅カデモ不審ナ行動ガ見ラレシ場合、即座ニ攻撃スルモノト心得ラレタシ」、と警告しておけ。ああ、それと特型駆逐艦の調査に向かっている『鷺』と『鳩』にも連絡を入れろ、「特型駆逐艦ヲ護衛、曳航シツツ本艦ト共ニコレヨリ陸奥湾ニ向カウベシ」、とな」

もつとも、奴が撃ってきたら我々は成す術なく撃破されるだろう

が と、新美大佐は胸の内で呟いた。

まだ中尉と言いつ争っている楓たち、だんだんと議論が一方的に加勢していつているがそれに冷水をかけるように、伝令から通信が入ったことが伝えられる。

「軽巡『多摩』より、信号！宛、臨検隊（臨検隊八即刻帰還セヨ）です。また本艦宛にも信号が……宛、『越後』（貴艦八陸奥湾へ移動スベシ、同湾マデ八本艦、及び水雷艇ガ同行ス、航行中ニ僅カデモ不審ナ行動ガ見ラレシ場合、即座ニ攻撃スルモノト心得ラレタシ）です」

（なるほど……ふう、これでこの少尉とはおさらばだな）

内心で楓は安堵の溜息をつく。例えば中身高校生であったとしても、この中尉との言い争いは本当に疲れるものであるらしい。

「……命令なので仕方ありませんが、このあとにどうなっても知りませんよ」

「お前はそれが出来るほどの権力を持つてんのかよ……」

中尉の捨て台詞についつい本音というか、翔の地が出てしまうが、本人は気付いていないようだ。

「……くッ！」

顔を悔しげに歪めながら荒々しく舷梯を降りていく中尉、何様のつもりなのだろうか……。

そして、中尉が見えなくなつたあと、楓がふと周りを見回すと周りの乗員達が驚いた様子で自分の方を向いている。

（あれ、何かまずいこと言った……？）

自分が注目されている原因がわからずに、楓はキョロキョロと周りを見てしまう。

「……大佐、今の大佐が仰つたのですか？」

（早川中佐、あなたは何を当たり前のことを尋ねるんだ）

「そうですが、何か失言でもありましたか？」

「いえ、先ほどから丁寧な言葉しか喋っていなかつたので元から丁

ばならなくなるだろう『越後』の各種資料を纏めるために艦長室へと降りていった。

艦長公室に戻ってきた俺は、まず深い溜息をつき、そのあと脱力してへたり込んだ。

「ふう……つ、疲れた。精神的に疲れたあ……。絶対指示で変なところがあつただろうなあ」

所詮はあるだけの知識を引つ張り回してきたに過ぎないので、言い回しは全て自分で考えたのだ。

しかしその引つ張り出してきた知識もまだ頭に定着していないように所々に穴があるようだし……。

「あ、まだ書類なんかも読んで艦の構造や乗員の把握もしないといけないし……。もうやだ、この仕事」

へたれと言うならば言え、そもそも軍艦の艦長なんて俺の専門外なんだ。本来はちゃんとした幹部学校に通って、現場で経験を積んだきちんとした船乗りの人たちが行くべき仕事なのに……。

(なんでこんな右も左もわからない素人にやらせるかな……)

その原因のほとんどは自分の責任だということに都合よくその時は忘れながら、俺は書類を分けるべく艦長室の椅子に座ったのだ。

(えくと、総乗員数は現在5393名で書類によると定員は3112名……。余剰人員は2281名と。何なんだこのやけに多い余剰人員……)

そして数十分の時間が経ったがまた違う問題が俺の頭を悩ませる……。

(……。あ、改めて身体見ると、やっぱり女の身体って気になるよな)

そう、普通の青年男子ならきつとおわかりになってくれると思うが、悲しい男の性である。普段はそんながっつかない俺ではあるが、自分が動かし、実質的に好きにできる体だ。気にならないはずがない。

(べ、別に自分の身体なんだから胸ぐらいさわっても……いいよ、な?)

(い、いやいやいやいや駄目だろうっいくら何でも!……でも、ちょっとだけなら)

(いやまて、この身体はいわゆる越後の身体なのであって……だけど俺の身体なのだから、遠慮する必要ないよな?しかし……)

その時の俺の動きを誰かに見られてなくて幸いだったと、後から俺は思ったものだ。

なにしろ手を自分の胸元まで持ってきては他人の手を引き戻すかのように錆び付いた機械のように小刻みに震える手を引き戻し、持ってきては引き戻しという何とも怪しい動きを繰り返していたのだから……。

そして数十分後、艦長室で俺は顔が若干赤くなっているのを自覚しながらもなんとか耐えきり、資料を一応纏め終わった後は『越後』の現状に構造、乗員の顔と名前を覚えようとしていた。

その日の夕飯は主計科が冷凍庫から見つけてきた豚の角煮が一人につき4切れずつ配られ、物資が乏しい時期に撃沈された艦から来た乗員には光り輝いて見えるほどの豪華な食事が出された。(とは言っても、沢庵、八杯汁、白米、前述の豚の角煮、キャベツとにん

じんの茹で塩もみ野菜といったものである)

中には口へ入れた途端に感激のあまり涙してしまう者もいた。もう二度とこうして飯を食べることはないと覚悟していたが故に、こういった当たり前の日常の有り難みがわかるのだらう。

各々がそれぞれ夕飯も済ませ、当直の者以外は分隊ごとに臨時で割り振られた居住区へ入り仲間達と雑談をしている頃、楓は一人艦橋の防空指揮所の後部から伸びている信号用ヤードにいた。

何をするわけでもなく、ヤードから足を投げ出して上下に二段ある落下防止用の索に腕を乗せながら身を預け、沿岸部にちらほらと見える灯りをただ眺めていた。

……落ち着いて考えてみなくても、普通に考えて今日一日のことは夢なんじゃないか？

そもそも普通の男子高校生だった俺が、こんな戦前の日本に突如現れた怪物戦艦の最高責任者でめちゃくちゃ美人の身体になっていっしょかも艦の魂になっていること自体どうかしてる。

そうだよ、多分これで艦長室の布団の中に入って寝た次の瞬間には病院の集中治療室にでもいるんだらうよ多分。

それか……うん、マイナス方向の考えはやめておこう。そう結論づけた俺はさっさとこの夢の世界から逃れようと、艦長私室へ行き布団に潜り込むのだった。

もちろん、夢オチという展開になるはずもなく早朝に目が覚めた楓は大いに落胆したことは、言うまでもない。

そして陸奥湾入湾から5日が経った4月6日 軍令部及び海軍省から沿岸部から70km離れて航行した上で、横須賀軍港へ入

港せよとの命令が『多摩』經由で楓達『越後』幹部たちの元に届けられたのだった。

『次のニュースです。昨夜6時半頃函館市湯の川町で、大型クレーン車1台を含む車両7台が相次いで玉突き事故を起こし、大型クレーン車を運転していた男性1人が死亡、現場を歩いていた高校生1人を含む7人が意識不明の重体、11人が重軽傷を負いました。事故から一夜明けた現場に、山田アナが到着したようです。山田さん、山田さん？』

『はい……、はい！こちらは昨夜、大型クレーン車一台、普通乗用車六台が相次いで玉突き事故を起こした函館市湯の川町の現場付近です。現場は見通しの良い4車線の橋の上で起きました。ご覧下さい、橋の上が完全に事故車によって塞がれてしまっています。ああ、見て下さい横転したクレーン車が橋から半分程迫り出してしまっています！』

テレビから流れてくる事故現場の惨状……私はそれを、朝食の最中に見ていた朝のニュースの中で初めて知った。その時の私は、事故に巻き込まれた高校生には気の毒だ、運が悪かったな……とは思ったものの所詮自分には関係ないことだ、と思っていた。しかしキヤスターが言った次の言葉に、私は時が止まったような感覚を味わう。

『事故に巻き込まれたのは函館市湯浜町在住の、
さん17歳
で……』

ッ！？

……今、何て言った？

いや、おそらく聞き間違いだろう。そもそもあいつが、あんな時

間にあの場所にいるはずがない。

「ご飯に鱈子、味噌汁、サケの切り身という朝食を終えた私は、昨日借りていたあいつのコートを腕に携え、バスに乗って学校へと向かった……いつもはこの時間のバスに乗るあいつが、今日は来なかったことに気にしながら。」

学校の朝礼、チャイムの音とともに先生が教室に入ってくる。……おかしい、毎朝欠かさず『おはよう』と言うのがこの先生の特徴であるのに、今日に限って、しかも終業日であるのにないのだろうか？

心なしに顔色が悪いようにも見える。まだあいつが登校していないのと合わせて、私の嫌な予感減るところが増すばかりだ。

「起立、気を付け、礼！」

学級委員が朝礼の挨拶をする。しかしなぜか先生はなかなか話し始めない……不意に私は、この場から早く立ち去れ、逃げろ、聞くな、という自分の声を聞いた。その直後……、

「え、皆には信じられないと思うが……昨夜うちのクラスの」

聞くな、きくな、キクナと頭が命令するが、体が動かない。そして、先生は決定的な一言を口にした。

「 駒場が、交通事故に遭い……意識不明の重体だ」

その瞬間、言い表せぬ奇妙な感覚とともに、私の世界はどんどん色を失い、黒く、染まって……何故だろうか、真っ直ぐなはずの黒板が、斜めに見えて……。

（鶴崎！？おい、しっかりしろ鶴崎！）

先生や周りの声がだんだんと遠くなっていくのをぼんやりと感じ

ながら、この日、私こと鶴崎淑恵の意識は暗闇の底へと吸い込まれるかのように落ちて行った……。

第一章 第二節・『陸奥湾へ』（後書き）

お久しぶりです、遅筆の陸奥でございます。

第二節、いかがだったでしょうか？

改訂前とは大きく変わったことと思いますが、妙なところ、違和感のあるところ等がありましたらご遠慮なくおっしゃってください。

さてさて、ようやく帝国海軍側との接触&そのころの未来では、となりましたがこのペースで進んでも一体いつ運命の12月にたどりつけるのでしょうか……？自分でも不安になります。

予定では二章か三章で12月に突入する予定ですが、どうなる事やら……。とりあえず来年中にはこの執筆速度を2倍、3倍に上げられるように頑張ろうと思います。

とりあえず、今回は1月に2回更新できるように頑張りたいです、実は12月の中頃に東京へ旅行に行くので、その関係で執筆時間や更新時間が取れなくなるために12月中にもう1回はおそらく無理だと思われるためです。

その時にいろいろ資料を買ってこようと思うのですが、なにかお勧めの資料などがありましたら作者宛で教えていただけると助かります。何せ地方なので大都市に出て行った時に集めなければあとはネットでの收拾のみ……。

ご意見、ご感想などがありましたらどんどんお聞かせください。嬉しいご意見もお待ちしております！

では、次回の戦艦越後物語・改 もよろしくお願いいたします！

第一章 第三節・『横須賀への道』

『越後』は今、軽巡『多摩』、駆逐艦を曳航する水雷艇『鷲』、『鳩』の監視を受けながら横須賀へと向かっていた。

当初は陸奥湾へ調査団を派遣、艦を掌握する予定だったのだが結局陸奥湾に調査団が来ることはなかった。理由と思われることはいくつもあるが、その艦内に収容されている技術が生半可な調査では皆目見当もつかないということが判明し、横須賀への回航が必須となってしまったことや、海軍省、軍令部、果ては陸軍や外部の有力者などの上層部の政治的妥協の結果などが主な理由だろう。

簡単に言ってしまうと、とりあえず横須賀に回航してそこで接收すればいい、という結論だった。艦自体の戦闘力は確かに恐ろしいが、艦内の警備火器の戦力などどうせ我が方と同じだろう、高が知れていると高を括ってしまったのだ。

そんな理由を知ることもなく、武装の俯角を下げ白旗を掲揚したまま房総半島沖へと向かう『越後』だったが、艦内では機材の使用方法が皆目見当もつかない物が多数あったため、また艦内の構造が分かっていないということもあり混乱が続いていた。

なんとかかまともに機能している科は航行に必要な機関、航海、通信や専門職の医務などであり、砲術や内務は配置場所が分からない、飛行は航空機関係の作業がないため暇を持て余すなど、ここはどこ、私は誰というように大変混乱していた。

とても戦闘ができる状態ではないのだが、当然日本陸海軍はそんなことは知らなかったため各基地からは完全武装した航空隊が次々と飛来し『越後』の上空で警戒しており、手の空いている乗員はその航空隊を複雑な面持ちで眺めていた。

彼、渡辺小五郎上等飛行兵もまた、その中の一人だ。

彼は航空母艦『千代田』に乗り組みエンガノ岬沖海戦で初陣を飾

り艦隊直掩機としてF6F『ヘルキャット』戦闘機多数と交戦、そして撃墜され今に至る。

彼を始めとする搭乗員の一部は現在、後部第三、第四主砲塔周りで暇を持て余している。最初は居住区に引っこんでいたのだが何人かは段々と甲板にでて黙って潮風にあたっているか、搭乗員同士で雑談をしているのだ。

さて、急ではあるがここで『越後』に現在乗艦している搭乗員の人数を覚えておこうと思う。その数、何と345人。この人数は優に一個航空隊の人数を凌ぎ、単純に単座機345機分、複座機で172・5機分、三座機の機数に換算しても115機分に相当する。その中で甲板にできてきているのは、その内のせいぜい3、40人といったところか。

それはさて置き、彼は今とても暇だった。今の彼には気軽に話ができる相手がいなかった。自分の母艦『千代田』の乗員が『越後』で一人も存在していなかったから……いや、正確に言うならば自分と同じ搭乗員がいなかった、と言うべきか。

確かに『千代田』からも何人かの兵士が同じように『越後』に存在していたが、それは他の分隊の者たちで『瑞鳳』、『千歳』に分乗していた第六五三海軍航空隊の搭乗員はいても『千代田』の搭乗員は一人もいなかった。

そんな彼が今出来ることは、舷側から張り出している機銃スポンソンから隣を並走している水雷艇を眺めるか上空を飛んでいる航空隊を見上げるしかできなかったのだが……。

「おい、ちよつと。そのあんた」

不意に、小五郎に声が掛けられる。しかしまさか自分に声をかけていると思っていない小五郎は黙ったまま水平線を眺めていたが、

「おい」

今更ながら気づくが、さっきから声を発しているのは若い女性らしい。そういえばこの艦には、女も乗っていたなと思いつくが今の彼にはどうでもいいことである。

しかし……、

「その……」

その声に何か寒気を感じた小五郎。ふっと自分より高い位置にある飛行甲板に目をやると……

「お前だッ！」

その時、記憶に残っているのは視界いっぱい広がった缶詰の空き缶と、そして少しだけ見えた長い黄土色の髪の毛……後に小五郎はこう述懐する。

思えば、こいつと俺との腐れ縁はここから始まったんだっ
たな、と。

さてその頃、回航先の横須賀軍港からは停泊していた戦艦『長門』以下、警備艦であった戦艦『榛名』、第二艦隊第四戦隊の重巡『愛宕』、『高雄』、『鳥海』、同第五戦隊所属の戦艦『山城』、4月2日に横浜浅野船渠に入渠整備予定だった『摩耶』と華南方面へ出動予定だった軽巡『五十鈴』等が急遽予定を変更し陸奥湾方面へ急行することに決定。また有明湾から横須賀へ向かっていた戦艦『比叡』も予定を変更し房総沖で合流することとなった。

また空母『赤城』も別働隊として出撃、主隊の上空援護任務に就くことが命じられる。

旗艦は戦艦『榛名』、指揮は横須賀鎮守府長官代行が執ることとなった。

「目標は、『多摩』警戒の下に現在、ここ横須賀へ向け回航中だ。本艦隊の目的は目標艦が万が一敵性だった場合、これの東京湾突入を阻止、撃退すること……これはまだ未確認情報ではあるが、彼の艦には51cm砲多数が搭載されているとの情報が入っている。各人、十分留意してもらいたい……では、解散」

『榛名』での短い訓令の後、各艦は順次出港してゆく。

『榛名』に率いられた戦艦『長門』、『比叡』、『山城』、重巡『愛宕』、『高雄』、『鳥海』、『摩耶』、軽巡『五十鈴』、駆逐艦『嵐』、『萩風』、『雷』、『電』、『暁』、『響』からなる15隻は軽巡『多摩』以下の警戒隊に合流するべく直ちに戦艦、重巡、水雷戦隊と三列縦陣の隊形を整えた後、房総半島を越え針路を北に取り北上を始めた。

同艦隊の『長門』や『愛宕』には連合艦隊司令部や第二艦隊司令部が置かれていたが、今回の出撃は鎮守府としての行動であるため、山本五十六長官ら連合艦隊側司令部は鎮守府側に協力することを承諾、万一の際には鎮守府側と合同し目標を撃破することに合意した。指揮官が鎮守府長官代行となっているのは、本来の横須賀鎮守府長官である塩沢幸一大将が体調を崩したため短期入院をすることになり、たまたま予備役に入っていた同期の大将がその間代理として勤めているためだ。

さらに、横須賀に残る艦も急ぎ鐘に火を入れて蒸気圧を高め、万が一の戦闘に備え東京湾口に進出、臨戦態勢を敷くこととなった。これに伴い、艦装中だった空母『翔鶴』は少しでも危険から遠ざけようと横浜沖まで曳航、退避することとなった。

また、各地の海軍航空隊、並びに陸軍飛行戦隊も零戦、九六式艦戦、九九式艦爆、九七式艦攻、九七式重爆や九九式軽双爆、九七式戦闘機、一式戦『隼』、一〇〇式偵偵、九七式偵偵など多数の機体を絶えず『越後』上空に張り付かせ少しでも不穏な動きを見せようものなら爆弾を雨霰と降り注がせる構えだった。

『越後』の出現によって大日本帝国陸海軍は、まさしく混乱の底に落とされていたと言えると同時に、皮肉なことにはいがみ合っていた陸海軍が凶らずも共同作戦を執るといった事態にもなっていた。

横須賀を目指し強速15ノットで本州沿岸を南下する『越後』だ

つたが、航行自体は機関科、航海科、内務科員達の尽力でなんとか安定していた。

その間、航行に関係のない者たちの一部は早川中佐指揮の下、艦内の状況把握のために艦内各所を探索していた。例えば主砲、副砲塔内の探索や、構造の調査、果ては陸奥湾調査では軽くしか行われなかった水密扉を解放し、艦底近くの水密区画までの探索など。さすがにそれは不味かったようで遭難者が続出したが。

しかし、その苦勞に見合うだけの戦果を得ることができたのだ。た。

それは……、

これまでの歴史や工業関係などの詳細な資料や機密書類、1930年以降の多岐にわたる航空機や艦艇、戦車などの多数の兵器に関する設計図や解体された状態で部品ごとに梱包されていた多数の工業機械などである。

『越後』の水密区画はその巨大さもあって1,300以上の水密区画に細分化されており、その内乗員が立ち入れる区画には、戦闘などを考慮しなかった場合の復元性に影響が出ない最低限の範囲で山のような資料や機械が丁寧に梱包されて保管されていた。そのせいでか乗員は知らないが『越後』の吃水線は本来の吃水線から2〜3m近く沈み込んでおり、速度、運動性能共に低下している状態なのだ。

資料などの中身がわかってくるにつれ、楓や未来の企業、自衛隊に所属していた面々はこれらがこの時代にとってはまさしくオーパーツ並みの資料であることを悟ったが、これらの資料が活かせるかどうかという微妙だ。

例えば、P-51D『ムスタング』やAD-1『スカイライダー』、B-17『ライニングフォートレス』、『YS-11』、『DC

- 4 / C - 5 4 』、 『 DC - 7 』等は活かすこともできるだろう。
しかし 『 B - 7 4 7 』、 『 A - 3 4 0 』、 『 B - 7 6 7 』、 『 A
- 3 0 0 』、 『 B - 7 3 7 』、 『 A - 3 2 0 』といったジェット旅
客機や F - 1 5 E 『 ストライクイーグル 』や S U - 3 5 『 フランカ
I E 』などの超音速戦闘機、 B - 5 2 『 ストラトフォートレス 』に
T u - 9 5 『 ベア 』などの超大型爆撃機。

『 九〇式戦車 』や T - 8 0 U D 『 ベリヨザ 』に S H - 6 0 『 シ
ーホーク 』、 A H - 1 『 コブラ 』、 A H - 6 4 『 アパッチ 』、 O P
S - 2 4、 S P Y - 1 D 等アクティブ、パッシブ双方のフェイズド
アレイ・レーダーの資料から果ては架空機 F A - 1 『 ファーン 』、
『 バンシー 』、 『 エステバリス 』等々……。

多数の航空機や戦車、果てはロボットの資料が報告されたが、一
目見ただけで作れるかこんなモンと後に見た各方面関係者全員は思
うこととなる。

なお楓は【紺碧の艦隊】などの火葬戦記系統がないことを疑問に
思ったが、よく考えてみると『 越後 』そのものが火葬の固まり的な
存在のために納得する。

とにかく、役に立つのかどうかは微妙ではあったがこれらの資料
や機械は速やかに楓以下の艦首脳部に知らされた。

『 艦底部を探索中の分隊より、報告！水密区画、船倉区画にて多数
の各種資料を押収、さらに探索を続けるとのこと！ 』

「資料？何の資料ですか」

『 報告によりますと 』『 えいぶらむす 』や 『 いーぐる 』、 『 ふらんか
ー 』、 『 とむきやつと 』等の資料だそうです 』

その報告を聞いた時、俺は耳を疑った。

「……すみません、それらの資料に正式名称は書かれていないかと
聞いてください」

早川中佐が報告者に聞き返すやり取りが有線の向こうで何回か繰り返された後、答えを伝えてきた。

『とむきゃつと』の正式名称は、『F-14』だそうです』

なんとということだ、そんなオイシイ……もとい、機密資料が？しかしこの時代で、果たして役に立つのだろうか……甚だ疑問だ。

その後も続々と上がってくる新情報、それらを聞いているうちに俺、ひいては現在『越後』に乗艦している女性乗員が離艦しないで済むかもしれない方法を考えついた……なんのことはない、誰でも考えつくことなんだけども……。

『防空指揮所より艦橋、前方に艦隊を視認！』

楓がその考えが浮かんだまさにその瞬間、艦橋の見張りが前方から接近する艦隊を捉えたと報告が入り、すぐさま双眼鏡が手元にある艦橋の殆どのも者が前方から接近してくる艦を確認しようとする。そして三列縦陣で接近してくる艦影を捉えたとき、艦橋の誰かがその名を呟いた。

「『榛名』だ……」

それに続いて、次々と艦橋職員的面々が艦の名を挙げていく。

「『長門』に『比叡』までいるぞ……！」

「あの艦橋は、『山城』だ！」

「『高雄』型が4隻……戦艦4に重巡4、それに駆逐艦が十数隻……。上の航空隊も併せると戦艦1隻を沈めるには、十分過ぎる戦力だぞ……ッ！」

『越後』が敵性勢力だった場合に備えて出撃してきた艦隊は、当時の切り札である日本戦艦10隻の内、4隻に加えこちらも貴重な『高雄』級重巡4隻に一個水雷戦隊相当の戦力とさらに、別働隊として修理が完了したばかりの空母『赤城』……これらが当時日本の

横須賀において即時出撃可能な艦の全てだった。これが、現在日本海軍が即座に出せる全力であった。

これらが示している事は、日本海軍がいかに『越後』を警戒しているかを示しているということでもある。

艦橋内に緊張が走るが、そこへ楓が気楽な声色でこう言った。

「随分と、盛大な出迎えですね……出来ればこちらも祝砲か登舷礼で迎えたかったです。今の状況では残念ながら適いそうにありませんからね」

内心びくびくなのを隠しながら冗談めかして言う楓、しかしそれは艦橋職員の緊張を少しは和らげるのに役に立ったようだ。

「……そうですね、自分としましてはやれと言われるのならば、いつでも登舷礼を行って見せますよ。それこそ自分の元部下達を使わせていただけるのならば、いかなる精鋭艦にも負けないほどの見事なものをご覧に入れましょう」

『ほほう、横川君。それは我々『武蔵』乗員に対する挑戦と受け取ってもよろしいのかな？』

「ええどうぞ。まあいかに黒石中佐の『武蔵』乗員といえど、我々『天城』乗員には敵わないでしょうがねえ」

『言ってくれるな、横川君。我々の練度の高さを見くびらないでくれたまえよ？』

「はいはいはい、お二人の艦を愛する気持ちはよおつくわかりましたから、そこまでにしておいてください。『武蔵』と『天城』の両艦がとても素晴らしい艦なのはわかりました……まあ私の『信濃』には敵わないでしょうが」

「『ちよつと待ってください、その意見には異論があります！』」

楓の言葉の意を汲み取り、軽い口調で返した横川に対し予想外の場所　主砲射撃指揮所から砲術関係での最上位士官、戦艦『武蔵』砲術長黒石磐雄中佐が反論し始めた。

このままでは無限ループになりかねなかったために楓が止めに入るが……どうやら一言多かつたようだ。だが、確実に艦橋内の緊張

は和らいだ。その証拠に、先ほどの痛みまでの緊張感がいくらか緩くはなっているように感じることができる。しかし表面上は微笑みを浮かべている楓ではあるが、表面とは裏腹にその心中は不安、恐怖に満ち溢れていた。

（俺にはあんな相手とやりあう度胸なんてない……今は最悪の事態を避けるために、精一杯のハツタリをかましてやるしかない、か……）

この時代において、楓に居場所はない。周りの将兵たちは大なり小なり同じ艦の仲間がいたが、楓にはそれが無い。それなら作ればいいだけの話なのだが……しかし、その力さえ今の楓には不足している。ならば、周りを最大限に利用して、時間をかけてうまく作り出していくしかない。

ただの高校二年生にとって、それはあまりに酷な話だった。

前方に、目標艦を確認。

その報告に、彼は双眼鏡を手に取り前方から近づいてくるその艦を見た。

第一印象は、ただひたすらに大きいということだ。横を並走する『多摩』と比べてみると、その異常さがよくわかる。あの大きさだとおそらく搭載されている主砲も情報通りなら51cm、最低でも『長門』の41cm相当のものは確実はず……。

この『榛名』、そして海軍最強の『長門』をもつてしても敵わないかもしれないその相手だが、それでも敵対行動を見せたのならば全力で撃沈しなければならぬそれを眺めつつ、彼は隷下の艦艇に指示を下す。

「全艦に、砲水雷戦用意を下令。いつでも交戦できるようにしておけ」

横須賀鎮守府長官代行、海軍大将鶴鷺鷺として……。

「『榛名』変針します、本艦と同針路！」

「目標、全主砲及び発射管を本艦に指向しています」

「目標陣容、戦艦4隻は順に『金剛』型戦艦『榛名』、『比叡』、

『長門』型戦艦『長門』、『扶桑』型戦艦『山城』。重巡は『愛宕』

、『高雄』、『摩耶』、『鳥海』、軽巡は『長良』型1、駆逐艦は

舷側の艦名から特3型『響』、『暁』、『雷』、『電』、『陽炎』

型『萩風』、『嵐』と思われます」

「上空の航空隊に太い赤帯1本の九七式艦攻を発見、空母『赤城』所属機と思われる」

『赤城』まで出てきてるのか……こりゃ相当警戒されてるな。俺は手元にあるマイクを全艦放送に設定し口を開いた。

『……こちら艦橋、天霧楓大佐より総員に達する。現在本艦は多数の艦に砲口を向けられているが、本艦がいかなる事態に陥っても、例え撃沈されるような事態に陥ったとしても反撃、発砲は禁ずる。繰り返す、発砲は厳禁！各人の忍耐に期待する』

……とは言ったものの、一番発砲しそうなのが俺なんだよなあ……

……はあ。

横須賀までの航行中、もし向こう側の、『長門』や『榛名』なんかの艦魂がやってきたらどう対応しようかと頭を悩ませていたが、それも杞憂に終わったようだ。

いや、実際に3、4人ぐらい乗り込んできたみたいなのだが、俺が『越後』の艦魂だというのは見破れなかったらしく諦めて野島崎のあたりで帰って行ったらしい。らしいというのはなんか知らんが3、4人ぐらい入ってきたなというのが直観とすべきか？そんな感じで分かったから出ていくときにも反応が感じられなくなつていうか……。

しかし艦橋に乗り込んできたときには驚いた。背中冷汗がダラ

ダラと流れ落ちていたけど気づかないふりをしてやり過ごしたが……。

「どうやら、あまりにも女性が多くて誰が『越後』の艦魂か判別できなかつたらしい。会話を聞いた限りでは俺と後数人怪しい人がいるらしいが……その数人で何？それはまあ置いておくにしても、後にも先にもこの時ほど『越後』の女性乗員の多さに感謝したことはないね。」

「何しろこっちはまだ断言はできないが半人半魂らしいから、普通の人には姿が見えない艦魂と話していたら周囲の人間には変な人間と思われてしまいそうだし……。せめて艦長室にいる時とか、一人で見るときとかに接触してもらいたい。」

その後、最後まで警戒されながらも横須賀にたどりついた『越後』は水先案内船の誘導に従い横須賀軍港に入港。そこからまた大変だった。

「指定された浮標まで、残り8000！」

「甲板作業員に達する！入港用意！係留、投錨の用意を開始せよ！」
「ラッパの号令と共に拡声器から指示が出され、甲板はにわかに慌ただしくなる。」

「速力、両舷原速に落とせ！」

「速力、両舷げんそおーく！」

『越後』は監視の艦と共に東京湾に入り、横須賀港に入港すべく入港準備が始められていた。

場所は海図を見て調べたところ、そこは未来に在日米軍の空母が停泊していたところだった。『越後』の吃水が深いために停泊できる場所が限られているらしい。横川少佐曰く、この吃水では呉入港は場所によっては難しい、とのことだ。

錨場に近づき『越後』の速度が徐々に落ちていく。しかし低速、しかもかなりの大型艦にもかかわらず小刻みに動くその姿からは、良好な操縦性能が窺える。電動機^{モーター}で推進軸を駆動する『越後』は速力の調整がスチームタービン艦に比べ格段に良く、低速域でも自在に艦を操ることが可能なのだ。

「距離4000切ったあ！」

「艦長操艦、両舷半速！」

「両舷はんそおーく！」

更に近づいたところで楓に操舵が変わり、見張りからの報告も頼りにしながら浮標へと艦の舳先を持っていく。

「左舷微速黒10、右舷最微速赤5回転整定！」

距離が2000を切ったところでさらに細かな操作が入る。このような低速域ではもはや舵は機能しないので推進軸の細かな調整で操艦するしかないのだが、正直楓の頭の中はもういっぱいいっぱいだ。

「両舷最微速！」

「現在、錨位500m前……残り200前……100前……50切りました！」

隣では横川が錨位までの距離を逐一楓に報告する。

「錨入れ！主機反転、後進原速！」

「主機反転、後進げんそおーく！」

「両舷停止ッ！」

艦首にある巨大な錨を投錨した直後、推進器が若干遊転した後、逆回転し『越後』は後進する力と前進する力が相反しあい若干前進した後、停止した。

「両舷停止、行き足止まりました！」

びたりと錨位のところに艦首が止まる、がしかし楓にとってはそれが成功したのかどうかはわからなかったが……、

「お見事です、大佐」

「いえ……航海科の皆さんの腕がよかったですよ」

横川少佐が労いの言葉をかけてくれた。その言葉で楓は何とか上手く停泊できたのだとわかったのだったが正直言って航海科の腕がよくなければここまで上手くいけなかっただろう。

入港が完了した瞬間にどっと今までの疲れを感じたような気がしたが、まだ色々な作業が残っている以上休む時間などあるわけがない。

打つ倒れそうになる体に鞭打ちながら、楓は夜まで他の士官たちとともに艦内の各作業の指揮を続けたのであった。

私が倒れてから……すなわちあいつが事故に巻き込まれてから早くも1週間が経った……。

あいつは未だ目を覚まさず、昏睡状態が続いている。……いや待て、何でこんなにあいつの心配ばかりしているんだ？あの時だってそうだ、事故に遭ったと聞いた瞬間に意識を失って……ただの幼馴染相手に。

バスを降りて家へ帰る途中、ぼんやりと歩いていた私の視界に不思議というか変というしかない光景が映った。朝には何も無かった筈の空き地に、いつの間にか小さな建物が建っていたのだ……看板を見る限り、喫茶店らしい。

正直、入るような気分ではなかったのだが何故か興味が湧いてきた。なんとすべきか……私の直感がここに入るべきだと告げている。

少しくらいならまあいいか、と私は結局その喫茶店に入ることにした。紅茶とケーキを頼むぐらいだから、財布にはさほど響くまい。

……内装は、私の予想よりも大分暗かった。これでは喫茶店というよりもハニー・ポッターに登場するトレローニー教授の教室みたいな占い部屋といった感じのほうが強い気がする。

「いらつしゃい……」

「ゐッ!？」

背後からいきなり声をかけられ、思わず奇声を発してしまった。
う、後ろからいきなり現れるな!

「こちらへ、どうぞ……」

どうやらテーブルへ案内してくれるようだが……。

「ご注文は……」

さつきから消え入りそうな声ばかりで本当に接客業をやる気がするのだろうか……。

とりあえず、メニューの中から私がよく食べるケーキを頼むことにする。

「じゃあ……紅茶とガトーショコラを」

「少々お待ちを……」

……普通に喋るようになるだけでも、結構な美人に見えると思うのだが。今の彼女はまるで……、

(幽霊みたい……)

「ありがとうございます……」

「い、御馳走様でした」

……うん、紅茶は濃さも温度も程良くておいしかったしガトーショコラも私の好みだった。しかし、一番気になるのはあの店員……

あの人、

ずっと昔に、会ったことがあるような気がする。

なんとなく、だけれど翔も一緒にいたよう、な……あれ、なんでここで翔が出てきたんだろう。

結局、釈然としないその疑問を胸に抱えながら、私は改めて帰途に着いたのだった。

第一章 第三節・『横須賀への道』（後書き）

登場人物紹介

《駒場翔》

役職：学生、高校二年生

出身：北海道函館市

身長：173cm

年齢：17歳

性別：男性

誕生日：11月15日

家族構成：父、母、妹

好きな物：軍艦（大小問わず）、海、自然、宇宙、歴史、絶景、模型を作ること、歌を歌うこと、のんびりと過ごせる程度の平和、美味しい料理、温泉

嫌いな物：辛い物、戦争、ナチス、精神主義、ABC兵器、ご都合主義、デスクワーク

ごくごく平凡な中流家庭に生まれた高校二年生。基本的に争いごととは嫌いだ、知り合いが傷つくのが嫌なために敢えて身を危険にさらすことが多い。冬の猛吹雪の最中、クレーン車と衝突し気付けば太平洋戦争直前の昭和16年4月1日、戦艦『越後』の最高責任者として、そして艦魂としてタイムスリップをしたかのような事態に陥ることとなる。部活動は弓道部に所属。大の船好きの幼馴染、淑恵の影響を受け旧海軍を始めとする海軍艦艇に興味を持つ。また何度も淑恵のアウトドアに付き合わされ何回も死にかけた経験から、死亡フラグには非常に敏感である。

《鶴崎淑恵》

役職：学生、高校二年生

出身：北海道函館市

身長：168cm

髪型：長髪

年齢：17歳

性別：女性

誕生日：12月14日

家族構成：父、母、兄、弟

好きなもの：艦船、航空機、試合、正々堂々、アウトドア、旅行、水泳、運動、牛乳、武術、温泉

嫌いなもの：口調を馬鹿にするやつ、不意打ち、卑怯な行い、しつこいやつ、腐女子、いじめ、ご都合主義、戦争、机に向かうこと、寒い場所

翔の幼馴染。実家は本州から移ってきた代々の武術家であり淑恵も例に漏れず幼少の頃から武術を修めてきた。翔の家、駒場家とは3代前の先祖が引越してきて以来の付き合いで、翔とも小中高と一緒に学校に通ったりするなど付き合いは長い。コンプレックスになっっているのは自身の喋り方であり、まだ幼稚園の時に見た映画の影響を受け、喋り方が若干というかだいぶ男性的になっている。流石に高校生にもなるうかという時には直したいとは思ったものの、どうにも自分のイメージと合わないような気がしてずると今に至る。部活動は剣道部に所属。大の船好きでもあり翔の軍艦好きは淑恵の影響が大きい。また、何度も翔を引き連れてアウトドアに行っている。ちなみに海軍戦闘機よりも陸軍戦闘機の二式単戦『鍾馗』のほづが好みである。

遅れましたが皆さん明けましておめでとうございます、陸奥です。

先月の終わりごろに東京に行ってきましたが、温かいですね東京。もう少し寒いかと思ってマフラーを持っていったのですが温かくて使う機会がありませんでした。また皆さんに教えていただいた各種資料を八重洲ブックセンターなどを始めとする各所で購入してきました。

これからどれほど活かせるかは筆者である私の腕にかかっているので、上手く活かせるかどうかは分かりませんが出来る限り努力していく所存です。

さて、今年の目標はズバリ『月二回更新』です。最低限この目標を達成できなければ終わりまで何年かかってしまっかわかったものではないので……。

完結まであと何年かかるかわかりませんが、読者の皆様にはご迷惑をおかけしますが願わくば最終話まで付き合っていただければ幸いです。

第一章 第四節・『弱き艦長』

横須賀入港直後、楓は各科の士官を招集した。今後の『越後』が取るべき道を決めるためだ。

陸奥湾でも一応の議論はしたのだが、『多摩』から提供された新聞などを読んでもいまいち現実味が湧かず、延々と保留する結果になっただけだ。

しかし、今回の在横須賀艦艇による艦隊の陣容 例えば戦艦『榛名』は1944年まで二三式方位盤を搭載しているため、『金剛』、『霧島』よりも測距儀の位置が高いのが特徴であり、戦艦『比叡』は多くの乗員の証言では、大改装終了が1939年以降、そして比較的早期に沈没しているためこの艦の存在によって開戦の2年前より後、又は開戦から1年以内だと判断がついた よってこれ以上引き延ばすわけにもいかないと判断した結果、何としても今日中……遅くとも向こう側が接触を図ってくる前に決めなければならぬ。

そのため横須賀到着後、直ちにこれからの行動方針を決めるための論議が行われた。そこで初めて出てきたのが、『太平洋戦争』と『現代日本社会』という簡潔な表題の数枚の薄い円盤、未来でDigital Versatile Disc、通称DVDと呼ばれる情報媒体である。

それぞれの歴史認識が食い違う中で、せつかく日本に関する映像が記録されているらしいから試しに見てみようじゃないかという話になったのだが……その提案が果たして、幸か不幸かは解らない。しかしそれは映像を見た者たちに想像を絶する衝撃をもたらした。

その映像は、どうせ普段テレビやビデオに映ったり、市販されていたような記録映像なのだろうと高をくくっていた楓や自衛官たちにも等しく与えられた。映像には普段、表には絶対出てこないであろう生々しい描写なども多数あり、8月前後に放送されたりする終

戦特番のようなものしか見たことがない楓は勿論、それよりもある程度のことは知っているはずの自衛官たちでさえ受けたこの衝撃は、口で言い表わせることのできるようなものではなかった。

フツ、と映像が途切れる。《太平洋戦争》編の後、《現代日本社会》編まで、一日の大半を費やしてまでの視聴、それがそれぞれにもたらした影響は大きかった。

腕を組み考えにふける者、男泣きに泣く者、あまりの衝撃に茫然となり視点が定まらない者、俯いて肩を震わせる者、正面を向いてカツと目を見開き、何かを堪える者……今日はもはや皆まともに話せる状態ではないと楓は判断し、明日再度集まることを命じたうえで解散を宣言した。かくいう楓も今はまともに物事を考えることすら難しい精神状態であり、吐き気を抑えることで精いっぱいだった。

会合に出席した士官のほとんどは、その日のうちにそれぞれの部下にこの結論を伝えたが、しかしきちんと理解できたものは少なかったようだ。ただ、おそらくもう二度と家族に会えないということだけは漠然と理解していた。

「はあ……はあ……畜生ッ！」
艦長寝室の奥にある洗面台、その前で俺は崩れ落ちてしまっていた。

……心構えは出来ているつもりだった。でも、そんなものこの時代の前にはシャボン玉よりも脆いものでしかなかった。

映像に出てきたのは、今まで見てきたどんなものよりも衝撃的で、怖ろしく、そして哀しいもの。

中部太平洋の島嶼戦で日本軍が行った万歳突撃、弾雨の中に突っ

込み、肉塊に変わっていく日本兵。アメリカの海兵隊が上陸用舟艇で、海岸へ向け突進する最中に隣の艇が砲弾の直撃を受け、飛び散る瞬間の映像。普段の生活では絶対に目にすることはないだろう生々しい記録。

自分が今いる時代、それがどんな時代なのかまざまざと思い知らされた。何が起きてもいつもどおりにいよう、そんな最初の気持ちはどこへやら。今は込み上げてくる吐き気を堪え続けるという情けない姿をさらしている。

厄介なことに俺は今、この『越後』における最高位の士官だ。早川中佐を始めとする下位の人たちにこんな姿を見せることはできない。弱音を吐く事なんてできない状況なんだ。

……責任を背負う立場が、こんなに辛いものだなんて思わなかったな。

暫く経って、やっと吐き気も治まってきたので、隣の公室にある椅子に寝転がる。どうでもいいけど艦長公室にあるソファに寝転がる奴がこの時代、果たして俺の他に何人ぐらいいるのだろうか？

「ふう……これから俺は一体どうしていけばいいのかなあ。車に轢かれた俺をいきなり戦争のただなかに放り込んで、一体全体何をしろというんだか……」

愚痴の一つも言いたくなる。

実際、今日まで何とかしてこられたのは虫食い穴だらけの知識と何故か成功するハツタリのおかげだ。そうでなければ平成の一高校男児　今はともかくとして、だ　が経験豊かな軍人たちの中でやっていけるものか。　言っているうちに、どんどん先が思いやられる。こんなことでこの時代を生き抜けるのだろうか？

考えれば考えるほど暗い考えになっていく頭に、いきなり電子音が響く。

体を起こして発生源を探ると、どうやら執務机の上から発せられているらしい。

どっこいしょ、と立ち上がり机に近づいてみると、置かれていた液晶画面のディスプレイの電源が突然入り、勝手に検索、なにかの情報を表示してきた。

勝手に動き出したことに得体の知れぬ恐怖を俺は感じたが、とにかくその情報を確認して……俺は声を失った。そこに映っていたのは

過ぎた時間は10分か、1時間か、あるいは数時間か。彼がこの副長室に戻ってからどれだけの時間が経ったのだろう。

会合が終わった後、彼を含めた中佐級の者たちは再び集まった。明日の論議に備えるために。

現在『越後』が置かれている状況を鑑みると、明日には行動を起さなければまずい。彼の本心としては、本当は今日中に意見を纏めたかったのだ……しかし楓も言っていたようにあの状況ではとても意見は纏まりはしないだろう。だがやはり、それでは遅いのだ。

そのため彼を始めとする一部の者たちは、あらかじめ意見を纏めそれを楓に上申し、彼女からの許可を得て明日の論議に彼女からの提案として出そうとしていた。

彼らが既に結束しているのだから、その提案はほぼ確実に通るだろう。幸いにして彼らの見解は皆一致していた。あの記録映像がその大きな原因となっているのは、確かめるまでもないことだ。

後の問題は……果たして楓がその提案を、受け入れるかどうか。彼らは全員、一応は楓が指揮をとることに対して異存はない。彼女の指揮は、時々挙動不審な部分があるが的確なものだ、『越後』の代表とするのに問題はないと考えている。

ただし問題があるとすれば、楓は女性であり、そしてその外見はとも40代には見えないことだろう。陸奥湾での一件から、こちらの日本海軍に女性軍人がいないことは明白である。それがより

によって不明艦の最高責任者なのだ、交渉の際に相手方にどういった影響を与えるかわかったものではない。

しかし、それは彼一人が考えたところで意味のないことだ。

彼が今やるべきことは、その提案内容を楓に上申すること。

……なぜこうなってしまったのだろうか、軍服のジャケットを羽織りながら彼は考える。黒石中佐曰く、「天霧大佐が指揮を執る前は、君が指揮をしていたから」と言っていたが……。

こうなった以上、考えても仕方がない。彼　　早川秀次中佐はそう判断し、部屋の扉を押しした。

人影一つ見当たらない通路……この『越後』と言う巨大な戦艦の中にいるのが、自分一人だと錯覚してしまいそうになる。壁を隔てた兵員室の中には多数の兵達がいるのは分かっているのだが、こう静かだとも落ち着かない。

早川がそう思っていたその時だった、前方のとある一室の扉が開く。中から出てきたのは機関を統率している……女性。確か

彼がうる覚えだった名前をひねり出す間に、彼女は早川の名を呼んでいた。

「あら、早川中佐じゃないですか」

「草薙、遥香少佐だったか……ん？　何故つなぎを着ているんだ」

部屋から出てきた彼女は何故か、船の刺繍がついた青い帽子に、青いつなぎを着ている。

刺繍には……DD-107うらかぜ、と書かれた文字が船を囲み、船の背景には棒状の物体が交差している……秀次から見れば、見慣れない奇妙な服装だ。

「つなぎ……？　ああ、これは私達海上自衛隊の作業服なんです」
なるほど、薄暗くてよく分からなかったが、確かにつなぎではなく上下が分かれた作業服のようだ。やはり未来の日本海軍は現在といろいろと変わっているらしい、と納得する。

「そういえば、中佐はどちらへ？」

遥香が早川に尋ねる。その視線は彼の服装に向いていた……：「そういえば、まだ制服だったな。まだ着替えていないことを思い出しながら、早川はその理由を説明した。

「なに、少し天霧大佐に御用があつてな。昼の会合があれば下手をすると、明日も意見がまとまらんかもしれん。流石にそれは避けねばならんから、あの後に中佐級の諸氏が意見を出し合つてまとめた意見を、大佐に上申するところだな。私が今制服を着ているのも、たまたまその役目を請け負つただけだからだ」

「なるほど……：早川中佐、私もご一緒してよろしいですか？」

「それは別にかまわんが……：まあよかろう」

何故？ という疑問が頭に浮かぶが……：彼女は三佐、旧軍の少佐相当の階級でありながら『越後』の海上自衛隊組の中では現在、最上上の立場だ。自艦だけではなく、他艦の者たちまで率いなければならぬ以上、今後の行く末を気にするのも当然の話だろう。

そう、彼は自己完結し承諾する。どうせ、これから上申する案も見られて困るというわけではないのだ。

それから早川と遥香は、暖房の効いた……：むしろ効きすぎて少々暑い艦内を歩きながら、艦長室を目指した。

途中、通路に迷いながら二人は艦長室に辿りつく。時間も時間だ、もしかしたらもう寝て休んでいるかもしれない。

半ば諦めながら、ノックをしようと手を扉に向け……：ようとしたその時、中から微かに声が聞こえてきた。

『ふう……：これから俺は一体どうしていけばいいのかなあ。車に轢かれた俺をいきなり戦争のただなかに放り込んで、一体全体何をしろというんだか……：』

二人の動きが止まる。

（……：車に轢かれた？ 艦と運命を共にしたのではないのか、いやそういえば大佐は……：言い方はあれだが、戦死された原因を言っていない。言われたのは戦艦『信濃』艦長だったことだけ……：）

この瞬間、彼の中で何故、楓だけ同じ艦の乗員がいないのか。その理由がすべてつながり、原因がわかった気がした。

「草薙少佐」

「ハイッ!？」

「今この場で聞いた一切のことは今後、他言無用である。胸の内にも話さぬようにすること、復唱!」

「復唱します、今この場で聞いた一切のことは今後、他言無用! 胸の内にも話さないようにすること、復唱終わり!」

周囲には、気まずそうに視線をさまよわせていた遥香ただ一人。

このことを他の者たちに知られてはまずい、何がまずいのか?

楓の死亡した理由が、まずいのだ。

早川を含め、この艦に乗っている軍人の大半は『戦死』したはずの人間だ。しかし、楓は今の言葉を聞く限り『事故死』である可能性が極めて高い……実際は軍人ですらないのだが。

彼はもちろん事故死とか、そんなことは気にしない。しかし戦場で死んでいない、そのことを細かく気にする者が出てくる可能性もある。余計な可能性は出来る限り排除すべきだろう。

……遥香を伴ってきたことを早川は後悔したが、もはや遅い。彼にできることは、他言しないよう命じることくらいだがそれも正規の命令系統ではない。後は遥香次第なのだ。

今まで来た通路を引き返す彼らの周囲を、重い沈黙が包みこんだ。

機関区に向かうという遥香と別れ、暫く間を置いた後早川は再び艦長室を訪れた。

「夜分遅く失礼します天霧大佐、早川です! 御用があるのですが、よろしいでしょうか?」

『どござ』

間髪をいれずに中から返事が返ってきた。まだ寝てはいなかったらしい。

「失礼します」

早川が初めて入る『越後』の艦長私室、その扉を開ける。

部屋の奥の寝台、そこに楓はいた。

既に軍服は脱いで着替えた……男物の着物を着た姿で。

「どうしました、早川中佐？こんな夜に尋ねてくるとは、なにか余程の事があつたのですか」

今まで読んでいたであろう本を傍らの机に置きながら、楓は早川の用を問う。

「は、実は先の議論が終わった直後、私を含めた中佐級の者たちで再度集まりまして……明日の議論に向けての合意案というものを纏めたのです。その件で、大佐にお話しがございましたので夜分遅く失礼を承知で、お伺いしました」

早川の口から、合意案という言葉が出た瞬間、楓の目つきが一瞬鋭くなつたのを彼は見逃さなかつた。

「勝手ではありませんでしたが、これ以上議論が長引くようではあまりにも危険であり、よつて我々だけでも意見を纏めておく必要がある、そう我々は判断したのです。これがその仮合意案です」

持っていた書類を、早川は楓に手渡す。

何も言わずに書類を読む楓に、彼は続けた。

「大佐がその案にご賛同いただけるのでしたら、よろしければ明日の会合で大佐の発案として提案していただけませんでしょうか？」

「……フム、大筋は分かりました」

「では」

ただし、と楓は言った。

「今更とやかくは言いませんが、こういった話し合いをするのであれば今後は、ぜひ私も呼んでもらいたいですね」

仲間外れにされたのかと思つた楓は、特に含むものはなく純粹に要望を行ったのだが、

「その件については、申し訳ございませんでした。しかし、会合後の大佐のあの様子を見ていると、とてもお呼びすることができような状態では……」

早川がそこまで言って、楓は自分が早川を責めていると勘違いされていることに気づく。

「あ、ああすいません！ 責めているとかそんなんではなくてですね、ちよつと寂しかったなあ」とか、そんなどうでもいいことなん……とまあそれは置いておきまして、この仮合意案の件については了解しました。それで、仮に私が提案するとして、若干内容を弄つても構いませんか？」

「それについては、おそらく問題は無いかと思います。あくまでそれは我々の合意案にすぎませんし、大佐のご意見もありましょう」
フムン、と楓は少し考え、

「分かりました。私の考えと大体は同じでしたし、二、三ほど気になる点はありませんが明日は概ね、この合意案通り私が提案しましょう。それで中佐、他には何か？」

「ありがとうございます、大佐。いえ、ご用があつたのはこれだけです。今日はこれで失礼いたします」

「わかりました、御苦労さま。ではお休みなさい、中佐」

「お休みなさい、大佐」

静かに艦長室のドアは閉まり、再び艦長室前の廊下から人気は消えた。

「……合意案、ねえ」

渡されたその書類を、俺はパラパラとめくる。

こういったものは話し合いがもたれていたのなら、誘ってもらいたかったというのは本当のことだ。しかし今回のことで、やはり俺はまだまだ努力が足りないようだというのが分かった。呼ばれなかったのは信頼されていないから、もしくは女性だからと甘く見られているか。だから会合には呼ばれなかったのだ。

まだごまかしが効く今のうちに、なんとか帝国海軍大佐としての一般常識、知識を習得し皆からの信頼を集められるようにしなければ

ばならないだろう。そうすれば、自然に俺にも声がかかるようになるだろう。

しかしまあ……、

「やっぱりあの映像見た後だと、考えることは皆一緒、てか」

一通り目を通した俺は、その書類を執務机の上に置き布団に潜る。発電のために今も動く機関から、心地よい程度に伝わってくる振動に身を委ねながら俺は深い眠りに落ちていった。

「なんですと!?!」

渡井中尉の声が会議室に響き渡った。その表情は納得できないという憤怒の気持ちがありありと表われている。

その他数人も渡井中尉と同じことを言いたいようだった。

これらの発端となったのは、俺のある提案が原因のようだ……やっぱり止めておいた方がよかったかなあ。

第一章 第四節・『弱き艦長』（後書き）

—（ ）やあ。ようこそ後書きという言い訳の空間へ。

このページは戯れ言だから、まず落ちついて見て欲しい。

うん、「また更新遅滞」なんだ。済まない。

仏の顔も三度って言うしね、謝って許してくれと言うつもりはない。

でも、このページを見たとき、君は、きっと言葉では言い表せない「苛立ち」みたいなものを感じてくれたと思う。

殺伐としたネットの中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい、そう思ってたこのコピペを使用したんだ。

じゃあ、今後の展開に対しての注文を聞こうか。

はい、皆様お久しぶりでございます。陸奥です。

前回の一月更新以来、約4ヶ月ぶりですね……申し訳ございません。

ここまで時間がかかったのはひとえに、私の作文力が低い以外の何者でもないでしょう。実際、話の中では一日ほどしか進んでおりません。しかも中身が薄い気が……ちなみに1941年から1945年までを一日ずつ書くことすると、全話合計1826話……はい、関係無い話ですね、すいません。

さて、実はこれからも数日ごとくらいしか話が進まない予定です。理由は皆様のご想像にお任せしますが。

……では、今回は短めですがこれから皆様が『戦艦越後物語・改』をご覧ください。この辺りで失礼させていただきます。

第一章 第五節・『楓の提案』

「……朝、かあ……」

窓から差し込むオレンジ色の光……それが日の出の光だと、枕元の時計は教えていた。時間は5時の少し前を指している。

一応、最低でも7時には起きることになっているが、起床する時間は各指揮官の判断に委ねられているので、ちょうどいい頃合い……という前に自分が指示すべき人員がいらないのだからちょうどいいものにもないのだが、とりあえず起きることにする。

『越後』では現在、節水命令が下されているため洗顔と歯磨きはコップ一杯分の水ですませた後、寝間着代わりに使っている浴衣から第一種軍装に着替えるのだが……これがどうにもやりづらい。

未だに女の体というものに慣れていないのと、下着に女物の下着ではなく晒sunを使っているという点が大半を占めている。何故女物の……あー、いわゆるブラジャーとかを着ないのかというと、俺の拘りというかプライドというか……もう着たら負け、という感じだ。

今でこそ女の体だけど、俺は男だ。もし着けようものなら変態じゃないかという意識が俺の中にはあり、そもそも着たくなんかない。沸々とわき上がる不満や文句に眉を寄せつつ、俺は服装を整える。ベルトを締め、紺のジャケットを羽織って前のホックを閉じ、短靴を履き、革製手袋をはめ、髪を邪魔なので一本に結う……そのうち切ろうかな。最後に軍帽をかぶって終わり。

艦内では基本、短剣は着けない。ほかにはポケットにハンカチなどの小物を入れ、鏡で全体を確認して　あ、ホックかけ間違えてた　準備は完了、まだ5時は過ぎていない……少し舷窓から外を覗いてみる。

『越後』の入港から一夜が明けたわけだが、未だあちらは厳戒体制のままだ。『山城』に至っては全火器をこちらに指向している。

35・6cmが12門、15cm7門、12・7cmが4門だった

っけか、機銃は忘れた。

……改めて見ると、かなりおっかないなあ。よく昨日は平気で寝られたものだ。

時計を見ると、ちょうど針が5時を指した……そろそろ行くか。

部屋を出て士官室へ向かう。艦長室を使っではいるものの正式な艦長ではないこともあって、俺は士官室で食事を取ることになっている。本当は艦長室で一人黙々と食べるそうだが、ちょっとそれは勘弁してもらいたかったのいろいろと理由をこじつけた訳だ。一人が嫌なら他の士官たちと同様、士官寝室に寝泊まりすればいい……そう思うだろう、俺もそう思った。だがいつの間にかこうなってしまっていたわけだ……どうしてこうなった。

さあ、今日の朝食は何だろうか……。欠伸を噛み殺しながらひとまず、今後の事は忘れて俺は暢気に朝食のメニューを夢想するのであつた。

……さて、朝飯を済ませた後は、士官全員が会議室へと移動した。その場ではまず、今朝までに新たに分かったことを各々の臨時に受け持っている部署から報告する。

「現在乗艦中の通信班、敵信傍受班の者達を動員し日本政府や陸海軍の通信を傍受した結果分かった事なのですが……」

昨晚から今朝までのわずかな変化も逃さず各々が報告する中、その中でも一番重要な情報は通信科を統率している、草加少佐の口から発せられた。

「昨夜から未明にかけ、本艦から半径50km以内の全都市にて戒厳令が敷かれた模様です」

戒厳令……と言う事は、

「現在本艦が停泊中の横須賀は勿論、東京、横浜、厚木、千葉、館山、相模原、多摩辺りまで、ということですか」

結構これって、ヤバい状況なんじゃないか？ だって、戒厳令と

いう事は工員も作業を中止してるかもしれないし……。

「日本の経済は勿論だが、『翔鶴』や『祥鳳』、その他艦艇の工期に影響が出る可能性もあるな……」

黒石中佐が、俺の思いを代弁するかのようには呟いた。

「はい、また米英の大使館も何か異常が起きたことには気づいていないはず。これがどのような影響を与えるかは、現時点で全く予想が付きません。さらに」

草加少佐が言葉を切った。何だ、まだあるのかと、部屋中の視線が少佐に集中する。が、俺はその後の事は耳に入らず考えに没頭してしまっていた。

「呉や佐世保、また支那戦線からも戦艦、空母に回航命令が発令された模様です。呉からは戦艦『陸奥』が

（なんてこった……竣工が遅れたりなんかしたら、航空隊や艦の訓練にどれだけの影響が出るんだ……歴史をいい方向へ持っていくどころか、むしろ悪化させてるじゃないか！）

他に、有明湾から回航途中と思われる『伊勢』、『日向』など……

日本海軍のほぼ全戦力が集結中という事が……

（もう一刻の猶予もない。昨夜、早川中佐達から上申された案を基にした案を皆に提案して『越後』を固め、一刻も早く日本政府に接触して戒厳令を解いてもらわないと……）

まだ、遅くはない。全てが終わったわけではないし、始まってすらいらない。大佐、昨晚お話しした案を……

（俺の打てる手は、これだけしかない……！）

大佐、天霧大佐！」

「は、はい!？」

しまった、考えに集中して話を聞いてなかった!

「えー……と」

いつの間にか、周りの視線が俺に集中していた。

と、とりあえず……、

「 昨晚、早川中佐を始めとする中佐階級の方々から上申された中佐級合意案を基に、今後の『越後』が取る道を私なりに考えてみた私案があります。お目通し願いたい」

外面は平静を取り繕いながら事前に刷っておいた書類を、早川中佐から順に一部ずつ回してもらった。昨日、布団に潜った後に文書を作成しなければならぬという事に思い至った俺は、大急ぎで室内に備え付けてあったPCで文章を起こし、艦長室にあった印刷機で刷ったのだ……おかげで、寝たのは午前2時を回っていたと思う。

「……なんですと!？」

突然、渡井中尉の声が会議室に響き渡った。

予想はしていたもののやはり、俺の案はなかなか受け入れがたいようだ……特に、彼をはじめとする若い連中には。いや、俺の方が年下なんですけれどもね？

楓が早川から受け取った合意案を基とした案。

その内容の幾つかを、具体的な例として挙げると……、

- 1、『越後』は日本政府と速やかに連絡体制を確立。
- 2、『越後』は日本政府と交渉し、自らの生存権を確保する。
- 1、『越後』は現在乗艦中の乗員を、帰順後も引き続き乗艦出来るよう日本政府と交渉する。

- 2、『越後』は日本政府と交渉するに当たり、以下の条件の履行を求める。

- 1、日本政府は『越後』と交渉中、同艦に対していかなる手出しもしてはならない。

- 2、日本政府は『越後』と交渉中、同艦に対して指揮官を含め10名まで監視の兵を駐在させることを可とす。

- 3、『越後』は日本政府と交渉中、可能な限り相手に刺激を与えぬよう努める。

3、『越後』は日本政府との交渉成立後、大日本帝国に帰順する。
1、『越後』は日本政府との交渉成立後、持てる資料のすべてを日本政府に公開する。

1、日本政府は『越後』から入手した資料を、事前に取り決められた場合などの例外を除いて第三者に漏洩してはならない。

2、『越後』は日本政府に帰順後、戦争回避、大陸戦線の早期終結への道を模索、和平へ向けて行動する。

1、『越後』は戦争の回避、ないし早期の終戦を図ることが困難と判断した場合、日本政府と協同し戦災者の削減に努める。

2、日本政府は『越後』の帰順後、太平洋戦線の勃発回避、及び現在継続中の大陸戦線の早期終結、出来れば本年度中に終結できるよう行動する。

4、『越後』は万一、日本政府との交渉が決裂した場合、速やかに横須賀を脱出。欧米を指し戦争の回避、ないし早期の終戦を図る。
5、『越後』は日本政府が攻撃してきた場合、全ての交渉を中断し横須賀より脱出する。白兵戦を除き交戦は極力避けるものとする。

1、『越後』は横須賀脱出が困難な場合は、乗員脱出後速やかに艦内に注水、また弾火薬庫に点火し自沈を図る。

6、『越後』に乗艦中の全乗員に対し、先の資料映像を公開すると同時に、資料室を開放する。

以上、6項目他を骨子としたものだ。

基本的に日本政府に帰順する方向の考えは合意案どおりなのだが、交渉が決裂した場合は交戦せずに脱出し、欧米を指して早期の終戦を図るとするのは楓の考えだ。その場合は日本やドイツの弱点を詳細に教えることで、枢軸側を短期間にかつ徹底的に痛めつけることになるが、それでも日本、ドイツに対する無差別爆撃を回避できたらそれだけでも数万人の人名が助かる。

また、脱出出来ない際に自沈するのは、交渉が決裂し『越後』が占拠されてしまった場合、艦内にある幾つもの未来の情報がどう使

われてしまつか分からないためだ。万が一、原子爆弾や超音速機、ミサイルなどの情報がナチスドイツに伝わってしまったらドイツ、そして日本の降伏が長引き、両戦線における戦いはより悲惨なことになってしまふ可能性がある。それを防ぐための措置だ。

もし、楓が本当に『越後』の艦魂だとしたらそれは、自殺をしようとしているのと同じこと。しかしその実感がなかったために、楓はいつも容易くこの選択を選ぶことができたというわけだ。

勿論、上記に紹介したもの以外にも、『越後』には外国人も乗艦しているため、彼らの立場や扱いに対しても言及したりしている。

この辺りで話を戻そう。渡井中尉らが問題とするのは4項、そして最後の6項である。

楓も4項は現実的ではないと考えてはいるが、6項だけは譲れないのだ。もし仮に交渉が成功した場合、現在乗艦している5、3、93名は、この時代において他にはいない“未来人”というかけがえない仲間となる。だが、今の状況では出身、世界観もなにかもがバラバラで仲間意識のへったくれもない。

その仲間意識を醸成するために楓は、今までの世界観や価値観その他を吹っ飛ばす程の衝撃を与えたうえで、

『このままでは、日本は世界を敵に回して見るも無惨な状況に追い込まれる。そんな悲惨な未来を防ぐために我々『越後』乗員は、総員一致団結して歴史を変えようじゃないか』と、確固たる理由をつけることで艦全体の連帯感を作り出そうと考えたのだ。

同時にこれは、高いリスクも孕んでいる。

下手に知識、情報を与えることが、かえって乗員たちの結束を結ぶ妨げとなる可能性もある。それぞれの異なった意見が衝突し、最悪の場合には艦内で暴動が起きてしまふ事態すら考えられるのだ。

「我々士官や、主要な准士官までという少数が知るといふのならば私もまだ賛成致します。しかし、下士官、兵にまで情報を公開する

というのは、いくら何でもやりすぎです！ 兵達に余計な情報を与えては、ただでさえ寄せ集めの乗員たちが、各々で勝手に行動し取り返しのつかない事態に陥る可能性もあると思いますがつ！」

渡井中尉たちの懸念はまさにここにある。士官などのまとめ役は200人ほどしか『越後』には乗っていない。それに対して下士官、兵は全体で3,000人を超えている。残りの約2,000人は民間人が大半なのだ。

その3,000人ほどに反乱を起こされたら、士官たちにそれを留める術はない。数の暴力によって瞬く間に『越後』は占拠されてしまうだろう。渡井中尉たちが思い描く最悪の事態だ。

「……渡井中尉、あなた方の懸念も最もです。しかし、我々の部下たち……特に、生死をも共にした自らの部下が、そう簡単に反乱などを起こすとお思いですか？」

もちろん、ハツタリである。しかし存外にこれが効いたらしい、中尉たちの表情が若干変わった。

「私の部下は、どういう訳かこの艦にはいません。しかし、他の方々は大なり小なり共に戦った部下がいるはずですよ。その部下たちを信じられないと。そう中尉は仰る訳ですね」

「ッそ、それは……！」

楓以外の士官たちには、それぞれ部下が数人から数百人の規模で存在する。特に黒石中佐が乗艦していた『武蔵』乗員は300人を超えており、単体のグループでは最大の規模を誇っている。渡井中尉は『早風』という駆逐艦のグループ約20人の中で最上級の士官である。

それぞれが共に戦い、共に傷ついた戦友だ。渡井中尉もそんな仲間たちを信じられない訳では、もちろんない。中尉が心配しているのは他艦の乗員たちのことだった。

見知らぬ彼らをいきなり信じるといわれても、無理というものだ。実を言うと、楓としても信じているという訳ではない。

しかしながら、今この状況で信じる信じないの選択をする自由は、

彼……いや、彼女にはない。自らの居場所をつくり、歴史を変えるという大仕事を成し遂げるために楓は、自身の良心の範囲内で場合によってはそれ以上の事も使える手段なら使える限り使おうとしていた。

楓に今のところ、味方はいない。焦った彼女が出した中で最善の考えが、自身の案で『越後』を固め、日本政府に交渉を申し入れることだったのだ。落ち着いて考えれば他にもっといい考えも浮かんだかもしれない、だが時間と状況はそれを許さなかった。

楓と渡井、二人がにらみ合い部屋を沈黙が支配する。しかし……、
「まあ、そこら辺にしておいてはどうかね。渡井中尉？」

その沈黙を破ったのは、今まで会議に参加することなく、ただ眺めていた外国人。

流暢な日本語で話す外国人の名は、マイケル・リチャードソン。元々はアメリカ海軍第七艦隊司令部勤務の少佐であり、『越後』におけるアメリカ系グループの最上位の士官でもある。

いったん渡井から視線を外したりリチャードソンは、真つ直ぐ楓を見据えた。

「アマギリ大佐、一つ確認したい事があります。この質問に対する答え如何で、今後の我々アメリカ軍人の身の振り方が決まると思っ
てください」

「……何でしょうか」
そう言われては警戒せざるを得ない。周囲の士官たちが身を固くする中、楓はリチャードソンの質問を待つ。

「あなたは、ニッポンを第二次大戦における勝者にする考えがありますか？」

「……勝者、と一口に言われてもいろいろと考え方がある」
楓は、軽く息を吐き言葉をつづけた。下手に考えることはせず、率直な自分の意見をぶつけるつもりで。

「純粹に相手を降伏させたものを勝者とする考え方もあるし、有利

その言葉とともに彼女……戦艦『榛名』の艦魂、榛名も甲板から消え去った。

「うほう!？」

会議から戻って寝室でまったりしていた俺だが、背筋にいきなりゾゾツと寒気が……なんかこつ、嫌な予感がする、というか嫌な予感しかしないんだが。

例えるなら、暴力的な幼馴染が襲いかかってくるあの時の前兆によく似ている……そんな訳ないな、多分気のせいだろう。

第一章 第五節・『楓の提案』（後書き）

登場人物紹介

はやかわひてつく
《早川秀次》

役職：帝国海軍軍人、中佐

出身：新潟県長岡市

身長：177cm

年齢：38歳

性別：男性

前役職：戦艦『土佐』副長

家族構成：父、母、義理父、義理母、妻、息子3人、娘2人

好きな物：白米・日本の城郭・戦車・軍艦・味噌汁・根拠のある
非戦派

嫌いな物：根拠のない非戦派・精神主義・全体主義・特攻・青汁

異なる歴史を辿った世界から来た人物の一人。早期講和ない限り日本に勝ち目はない、との考えをもっており主に副長的立場から楓をサポートする『越後』の第2の長。

生粋のエリートではあるが非常に柔軟な思考の持ち主であり、時として楓の意見とは真つ向から対立することもしばしば。大艦巨砲主義者ではあるが、同時に航空機の脅威も認識しており被弾時の応急処置に対して、我流ながらもよく勉強しており防御指揮官として艦の保全対策を日々模索している。

よしかわよしかつ
《横川喜勝》

役職：帝国海軍軍人、航海少佐

出身：千葉県浦安市

身長：181cm

年齢：35歳

性別：男性

前役職：戦艦『天城』航海科所属

家族構成：妻、息子、娘2人

好きな物：家族・酒・煙草・軍艦・美味い料理・海

嫌いな物：真面目すぎるやつ・変に理屈っぽいやつ・間諜^{スパイ}・ムカデ

気楽な性格をしており、開戦にはやはり反対しているがもはや手を打つには遅すぎる時期だと認識している。早川中佐や菜野大尉と同じく別の歴史からとんできた人間であり、実は三人は同じ艦隊で共に戦っていた。現場一筋で叩き上げられきた経験豊富な航海士官であり、ここぞ、という時には非常に頼りになる存在である。何かあっても何時までも引き摺らずスパツと切り替えることが出来る思考の持ち主。

《草加拓海》^{くさかたくみ}

役職：帝国海軍軍人、通信少佐

出身：岩手県紫波町

身長：176cm

年齢：32歳

性別：男性

前役職：第一航空艦隊通信参謀

家族構成：父・母・姉

好きな物：バナナ・理想の未来・日本・海

嫌いな物：誇りを失った未来の日本・泳ぎ

日本という国に誇りを持っており日本の行く末を案じ日々案じている。以前は一航艦の通信参謀という重要なポストについており、

『越後』転移後は通信のトップとして、様々な情報を収集し楓に伝えるというこれまた重要なポストについている。たまに何を考えているのかわからないときがあるが、某漫画と違い同士が多数いるため、そして諸々の理由などから核爆弾を作ろうなどという暴挙には今のところでていない。

お久しぶりです、陸奥でございます。

今回も四ヶ月空いてしまった……月二回更新の目標が安定して行えるようになるのが、はたしていつになることやら。

やっぱり高校三年は忙しいですね、PCに触る暇がないです。

暇を作り出す余裕がない……。しかもPCは壊れて修理に二ヶ月近くかかっているし……携帯だと書きにくくて進まないものでして。

就職先に受かってても四月からさらに四ヶ月近く更新無理っぽいし、その後も暫くまともにネットへ繋がられる環境じゃないみたいだし、いつ終わるんだろう……。

あ、細部はまだ詰めてませんが開戦から終戦、そして現代までの骨組みは出来てるんで投げ出すことはないです。というか、本編を書こうとしたら細かい設定ばかりが頭に浮かんだり、まだまだ先の話が浮かんだり……そりゃ進まんわな。

これからの予定としては、九月二回更新（もう一話もすでに完成済み）、以降も二回を目標とし、三月は三〜四話を更新しておきたいです。

この後となると、本気で更新困難となりますから……。 （捕らぬ狸の皮算用とならないよう、鋭意努力します）

では、次回の《戦艦越後物語》もどうぞよろしくお願いします！

第一章 第六節・『越後の切り札』

会議が終わり悪寒を感じてから数時間後、楓は艦長室から直接、全ての士官室、兵員室に設置してある艦内放送機へ繋がるマイクをとった。

この放送によって、これからの『越後』の幾末が決まると言っても過言ではない。しかし、もう楓にやめるという考えは欠片もない。一回大きく深呼吸……そしてカチリ、と送信ボタンを押した。

《現在『越後』に乗艦中の皆さん、こんにちは。私は現在、臨時に艦の指揮を執っている海軍大佐、天霧楓です。正直皆さんの中で現状を把握している方はほぼいないと思います。

それらを踏まえたうえで

「何だ？」

「女の声だぞ……」

「おい、静かにしろ！聞こえないだろうが！」

昼飯時のいきなりの艦内放送に、昼食を食べながら雑談に興じていた居住区の水兵たちが色めき立つ。

班長が素早く静止するが、暫くざわめきは止まず放送の音が聞こえなくなってしまうた。

実力行使によって再びざわめきが止んだのは、かなり時間が経ってしまったからだ

《 よって明日より三日間の間、中甲板第一、第二資料室を開放します。資料室からの資料の持ち出しは禁ずるので、あらかじめご了承願いたい。自分の目で見て、聞いた方がより実感できるでしょう。また、この後1400より各居住区画に備え付けられているえきしよ……いえ、受像機を通じてある記憶映像を放映します。これはおそらく、殆どの乗員に関係のある映像のはずです。皆さんにはなかなか信じられないかもしれませんが、これは実際に起こった

らにあるPCを操作した。このPCを含めた『越後』の艦内に備え付けられているPCは、分厚い装甲の下にある電子演算室に繋がっている。

ほどなく机の上に置かれているディスプレイの液晶画面に細かな文字の群れが現れた。それらの中には多数の名前が並んでいるが、それらに目をくれず楓はただ一点を見つめていた。

駒場照永 陸軍少佐 第七師団所属 樺太庁真岡支庁真岡町
S 2 0 , 8 , 2 0 2 8

駒場翔の曾祖父の名が、そこにあつた。

勝手に画面の電源が入ったあの時、表示されたのは駒場翔の曾祖父、照永に関する情報だった。

今まで、翔が曾祖父について知っていることは、時々曾祖母の昔の話に出てきたり、お盆の墓参りの時に墓石の横に書いてある没年月日に、名前だけ。

当然、駒場翔が見たことがある曾祖父の存在は物言わぬ遺影のみ。しかし今ならば生きているのだ。

会ってみたい。なんとかしてこの戦争を生き抜いてもらって、曾祖母とその生涯を共にしてもらいたい。駒場照永を語る時、どこか嬉しそうな顔をしていた曾祖母とともに……。

一度そう思ってしまった後は、その想いは止まることを知らずに溢れ出てくるばかりだった。今まで、戦争に参加するなどさらさら御免だと思っていた楓はこの時、どうにかして曾祖父を助け、生き延ばそうと決意したのだ。つまり楓は、自分の曾祖父たった一人を救うために周りを巻き込んで歴史を変えようとしているのだった。

『越後』に大量に積まれている資料などは戦後の発展のためにこそ使うべきだ、とも考えてはいるものの、それも結論を言ってしまうと将来の自分が楽をしたいからでもある。

楓が知っているこういった過去に遡ったという物語の主人公は、その大半が“日本”という国を襲う敵や運命から救おうと戦ったり、策を弄したりと他の人々の為に動いたりする。しかし、楓は言ってしまうえば私利私欲だ。

曾祖父一人を生かすために、強大な戦力を発揮可能な戦艦『越後』と、それに乗っている多数の人間、そして日本という国を巻き込んでしまうのだから。

自分は間違っていると、楓は自覚している。だがもはや引き返すことは出来ない。乗員に真実を告げた後、暴動の兆候が現れなければ明日から本格的に活動を行うと決した以上、いまさら引き返せないのだ。

ああそうさ、自分は間違っている。だがそれがどうした。

間違いもそれを貫き通せば、やがてそれが正解になるかもしれない。俺は、間違っただま突き進んでやる、そしてこの戦争を絶対に生き残って曾祖父ちゃんに会って見せる！

決意の表情を浮かべるその顔は、確かに女性のものなのだが……何故か女らしさのかけらもなく、まるで男と錯覚してしまいそうな雰囲気があふれていた。

それが、天霧楓こと駒場翔が覚悟を決めた瞬間だった。

入港から二日目の4月9日、すなわち全乗員に情報を公開した次の日。再び会議室に集まり乗員の結束を確認した面々は、早速どのようなあの敗戦を回避するかを検討を行った。その目的を成し遂げるためには、やはり『越後』の力をもって直接歴史に介入するべき

だ存命しているはずの男であった。

第一章 第六節・『越後の切り札』（後書き）

就職試験も終わり、後は結果を待つだけという今日この頃。皆様はどうおすごしでしょうか？

私ですか？ 落ちたらどうしようかと戦々恐々の毎日で（ry
航空業界を目指していたはずなのに、いつの間にやら海への道を
進みつつあったり……あれ？

いえね、航空専門学校に進学しようとしていたのですがね……先
立つものが、ない訳ですよ。

これ以上親に迷惑をかける訳にもいかず、進学から就職へと舵を
大きくきったわけです。

まあまだ長い人生の中で、航空に携わるチャンスはいろいろとあ
るでしょうからしぶとく狙っていくことにします。

つまり私の近況はこら辺にしておいて、皆様どうでしたか
今回のお話。

作者的にはいろいろと無理矢理感が否めません。もっと説得力の
ある理由を付けたかったです……。

楓が歴史を変える動機なんかも明かされたところで、こら辺で
いったん楓からはなれて艦内の主要人物たちの活動を描写してい
きたいところです。艦の紹介なども含めて。

ちなみに唐突ですが、ここでアンケートという名のナニカにご協
力ください。

本編最後に楓達が見たもの、それは果たして!？

A・F・4（）、〇〇（）抜かずの剣こそ平和の誇り

B・F - 14 (、・・・) 管制塔に挨拶したい
C・S U - 33 (、・。ー。・) ジェントルマンがこれほど集まるとは壮観だな

D・F - 15 (、・・・) 花火の中に入ったぞ!

E・F/A - 18 (、・・・) それが今日、我々が讃える人類の独立記念日だ!

F・A - 10 (、・。・) 何のために生まれた!? A - 1

0に乗るためだ!!

G・B - 52 (、・。・) そこでB - 52が、実際に艦船から飛び立ち、攻撃をするわけです!

H・E - 2 (、・。・) 三機? エコーじゃないのか!

I・B 737 (、・。・) ジェット旅客機では世界一のベストセラー!

H・(程々に) 自由枠

感想の最後にB、とかC、と一文字入れるだけで十分ですので、どうかよろしくお願いします。あ、ちなみにこの機体がこれからの展開に小さく影響はしても大きく影響するという訳ではないので気楽に選んでくだされば幸いです。機種が分からない人は調べてみてください。

それにしても見事にアメリカ機ばかり……ロシア機や欧州機でネタがあるやつ少ないんだもの。ちなみにB737は完全に趣味です。あと、最近某理想郷へと引っ越そうかと思っていたりいなかったり。いえ、この作品のレベルがチラシの裏よりも低いことは十分承知してます不是吗?

第一章 第七節・『魔王の使徒』（前書き）

前回の更新からはや一年が過ぎ去り、その間も活動報告等を通じての近況報告を全くしていないにもかかわらず、いまだに待ってくださっている方々に、心からの感謝と謝罪をいたします。

《戦艦越後物語・改》久しぶりの更新となります。ただ、無いようにはあまり自信がありません……。

第一章 第七節・『魔王の使徒』

(なんで、なんでこれがここに)

楓の目の前で、静かにその場で佇んでいる巨大な“鳥”……。

その“鳥”の名は

「A - 10……!!」

フェアチャイルド A - 10『サンダーボルト』、またの名を『ウォートホッグ』というアメリカ空軍において異色の存在感を放つ対地攻撃機。

楓が一目見てみたいと願っていた機体だが……まさかこの時代のここで実物を見ることになるとは、しかも直に触れるようなことになるとは思ってもいなかった!

興奮する彼女の前には、ジェット機自体が暗中模索だったこの時代に、『越後』以上に存在してはいけなないモノが圧倒的な存在感を持っていたのだ。

だが、実物のA - 10神を目の前にして、目を輝かせていた楓を一気にクールダウンさせる言葉が耳に入ってきた。

「瓜畑少佐、申し訳ないのですが……これは一体、何なのですか?」
傍らの洞爺大尉が、瓜畑に尋ねた言葉に彼女はハツとする。

(そうだ、本来俺はこいつの存在なんと知っていないはず……)

頭の中で慌てふためく彼女を、さらに追い詰めるような言葉が瓜畑から発せられる。

「あたしも詳しくは知らないけど、どうやら大佐は知っているようだよ?」

そして楓を見る二人。大丈夫、まだごまかせると判断した楓はなんとなくが良い文句がないか必死に頭をひねるが……、

「いえ……」

なかなか思いつくものではない。だが、ここで回航途中に提出された書類の中に、A - 10の物があつたことを思い出した。

「偶然提出された資料の中にこの機体の物があつてですね。特徴的な兵装、外觀、そして致命傷に等しい損害を被つても飛行可能という航空機だというのが印象に残っていたので、覚えていたんですよ」

なんとか苦し紛れに返事を返すも、その内容は何の変哲もないつまらないものしか思いつくことはなかった。

（いい加減俺も平然と答えられるように出来ないと、いつボロが出るか分かんないな……）

「なるほど、そういうことですか。それで、この機体は、えー……えーてん、というのですか？」

眼前にでんツ！ と存在感を放つ、機首に備わった七つの銃口を持つガトリング砲を眺めながら、洞爺大尉が楓に尋ねる。大尉も漢である、やはりその持つ、艦艇とはまた違う鉄くろがねの存在感に惹かれたのだろうか。

「そう、この機体は未来のアメリカ空軍が保有している、A - 10という機体だそうです。資料によると最大速度はP - 38やF4U等の戦闘機以上、しかもB - 17等のアメリカの重爆以上の量の爆弾を搭載可能で、きわめて強力な対地攻撃能力を持つ未来の爆撃機なんだそうです」

（この時代のレシプロ戦闘機……P - 51でさえ最高速度が700km前半なんだから、今の時点で追いつける航空機なんてほとんどいないはず……多分。そういうえばこの時代の日本木の基準でいうとA - 10は襲撃機なのか？）

ちなみに襲撃機というのは、日本陸軍で使用されていた対地攻撃機の事である。有名なのは九九式襲撃機で、主な任務はA - 10と同じく近接航空支援だ。

しかし楓の興味は徐々に目の前のA - 10の機体に傾きつつあった。

想像以上に大きいGBU - 8『アヴェンジャー』や様々な計器が並ぶコクピットの内部を見てテンションはどんどん上がっていく。

彼女は銃口を覗いたり、前輪格納部の中を見たり等々、普段では絶対に出来ないことを好き勝手にやっていた。

「戦闘機以上の速度の爆撃機ねえ……モスキートみたいな感じかね？ けど、発動機が見当たらないね。後ろのあれかい」

「妙に羽の数が多のですが、あんなので飛べるんですか？」

妙なテンションの楓を放っておき、瓜畑と誠の二人はA-10の低い翼の上からエンジンを見ていた。もちろん乗ってはいけなところには「No Step」と表記されているので、それには二人とも注意しているが。

「さて、それは実際に見ないと分からないけど……そういや前に聞いたことがあるよ、ガスタービンっちゅう新型の発動機が開発されているってね。そいつは蒸気タービンみたいに、羽の数がそれはそれは多いそうだ」

「ガスタービン、ですか……それでは、もしかするとあれが？」
「かも、しれないね」

タービンというものはこの時代、主に蒸気タービンが知られておりガスタービン すなわちジェットエンジンはまだまだ発展途上、研究段階の代物なのだ。それでも、イタリア、ドイツやイギリスといった一部の先進国では研究用として実用化に成功しており、それを搭載した航空機の初飛行も済ませているがこんな巨大なエンジンはいまだ存在しない。

A-10に搭載されているエンジンは、高バイパス比のターボファンエンジンが使用されている。この時代はまだ、ターボジェットエンジンやパルスジェットエンジンなどで、それらも出力が小さかったり、耐久性が低く、燃費も悪いためまだまだ問題が山積みしているような研究段階の代物が多い。

しかしA-10に搭載している物は、低燃費であり、耐久性もよし、しかも出力も大きい等々、非常に優れた物だ……そしてなによ

り、TF34は研究段階を既に抜けた実用段階の物。これは大きいと言わざるをえない、なにせ数々の初期不良、故障を解決済みなのだから。さらにこのTF34の派生型として、LM500というものがある。これは『はやぶさ』型ミサイル艇の機関としても採用されている船舶用エンジンで、このことからTF34は将来的に船舶用エンジンを作る資料としても、大変適した物なのだ。

「そんな研究中のものを装備している機体が、こんなに完成した状態であるとは心強いなあ……」

実はA-10は1機だけではない、全機合わせて11機が『越後』甲板上に係止されている。飛行甲板に並ぶA-10の列線を眺め、誠は胸を高鳴らせた。もし楓が話した通りなら、たった11機ではあるがこれほど頼もしい機体はないだろう。だが

「しかしま……使いこなせるかどうかとなるとまた別問題だがね」
「……そうですね」

現物があつても飛ばす人間がいなければ宝の持ち腐れ……いや、飛ばす人間だけではなく整備士や補給部品も必要で、さらにいえばそれを造る工場や、訓練や整備を行う場所も必要になり、管制や誘導なども要る。他にも必要なものは多々あるが、これらをすべて挙げればきりが無い。たくさんの表からはなかなか見えにくい部分が完全に揃って初めて、航空機は稼動できる。

今あるのは、限られた数の操縦士に整備士、そして部品に機体だけ。もしかしたら場所も加わるかも知れないが、部品の供給はとても望めない。『越後』の技術をすべて開示したとしても、日本が実用に耐えられるものを作るには数年から十数年かかるだろう。ということ、少なくともこれから数年間は補給なし、という事になる。『越後』に搭載されている部品の数次第では飛行の回数も限られ、訓練もままならないかもしれない……いくら機体が強力でも、これでは役には立たない。

「まあそこら辺の面倒なことは、後々考えればいいさ。重要なのは今ここに“ある”ってことだからね」

「……つまりこれらの機体を、政府側にカタログスペック“だけ”公開して見掛け倒しの切り札にすればいいと？」

その言葉に、瓜畑は目を丸くして誠の顔をまじまじと見つめ、次の瞬間腹を抱えて爆笑した。

「アツハツハツハツハ！　そういう手もあつたねえ、いやいや気がつかなかつたよ！」

「え、そう言うつもりでおっしゃったんじゃないんですか少佐！？」

「はーまったく、若い頭には勝てないね。私は整備屋だからただ機体を整備して飛ばすことだけ考えていたよ……そうか、そんな使い方もあるね……大佐！　どう思います、洞爺の案は？」

「……へ？　え、ああ、とてもいい案で、検討する価値は十分にあると思いますよ。全力を發揮できるかどうかはともかく、カタログスペックだけなら、現行の機体ではどのような機体も太刀打ちできませんからね、A-10は」

アヴェンジャーに夢中で全然話を聞いていなかったが、一応耳に音が入っていたので何とか答えを楓は返す。

と、その時。瓜畑が何かを思い出したのか、パンと手を鳴らした。「そうだ、大佐。他にもいくつか航空機があるのですが、ご覧になりますか？」

他にも……？　と訝しがる楓に、瓜畑はこう返した。

「えーと、確か……」

F-2とF-22つてやつですね。

その後の事については、また別の機会に譲ることにする。ただF-2とF-22を見たときの楓のテンションは、アフターバーナーA/Bを焚いた戦闘機のごとくぶっ飛んでいたということは、言うまでもない。

薄暗い部屋の中では、十数人の男たちが横須賀周辺の海図を中心に周りを囲み侃々諤々の議論を行っていた。そこへ艦橋に走っていた伝令が戻ってきた途端にピタリと声が止み、全員が伝令の報告を一言一句たりとも聞き逃すまいと耳をそば立てる中、伝令が声を張り上げんと口を開く。

「報告！ 一一〇〇時に至るも、『当該艦』に新たな動きはなしと認む！」

その報告に室内には、安堵とも落胆ともとれるため息がもれる。それは今までと全く変わりのない報告でしかなかったからだ。

「……『当該艦』に対して、鎮守府からの動きもないのか」
若干の間をおき、重々しい口調で、この中で最上位の将官が伝令に問うた。

「は、未だ陸戦隊が臨検を行う様子も、軍使を派遣する様子も、全くありません！」

その答えを聞き男たちの中には、焦燥とも疑念ともつかない雰囲気漂う。

既に『当該艦』が入港して二日目になる。それにもかかわらず鎮守府は何の行動も起こせなかった。理由は容易に考えられる。突然の介入を喫った東京憲兵隊と、それを断固阻止すべしとの軍令部からの命令を受け、本来の任務を放り出してまで出動せざるを得なくなった横須賀特別陸戦隊とによって発生した陸海軍の緊張状態。それによって海軍側の当初の思惑から全く外れた展開となり、さらに政府内では未だに結論が出せずに混乱していた。

そこへまた扉が開き、水兵が一人、入室する。
「軍令部より、再度返答あり。」「『当該艦』に対する処遇は目下検討中、追って知らせるものとす。軽挙妄動することなかれ」とのこと！」

それが、つい先ほど問い合わせた軍令部からの返事であり、もはや聞きあきたその電文に彼らの苛立ちは最高潮に達する。

そしてついに耐えきれなくなったのか、一人の佐官が声を張り上

げた。

「何をぐずぐずしているのだ軍令部は！　かの艦は帝都をも射程内に捉えているというのに、何の行動も起こさないとはい！」

「軍令部も政府も状況は把握しているはずなのに、何度問い合わせても返事は決して手を出さなな一点張りのみ。一体いつまで検討を続ければ気が済むのだ……ッ！」

軍令部、そして海軍省や政府に対する罵倒雑言が室内に噴出する。彼らは連合艦隊司令部の参謀だ。戦艦『長門』に座乗している連合艦隊司令部は状況を把握すべく、各方面と連絡を行っていた。自然なまでに動きのない上層部に対し業を煮やした連合艦隊司令長官、山本五十六大将が早期に『越後』側と接触するよう関係各所に働きかけているためだ。その為『長門』の通信室から長官公室や作戦室にかけての通路は頻繁に伝令が行き交い、次から次へとくる電文に通信室は文字通りてんでこ舞いの有り様となっていた。

「まあ、待て。少し落ち着きたまえ諸君」

部屋の隅で静かに状況を見守っていた将官の声で、未だ熱気は収まっていないものの作戦室に静寂が戻った。彼の名は伊藤整一、連合艦隊の参謀長だ。

「……しかし、伊藤参謀長。所属不明の軍艦、しかも戦艦を放置したとなれば、このままでは海軍の威信に関わりますぞ」

「うむ、確かにその通りだ……しかし、この状況も長くは続くまい」
参謀たちの危惧を、確信を持った声で伊藤は否定した。

「何故です」

「山本長官も、臨時とはいえ横鎮の指揮を執っている鶴鷺大将も、ただ座して事態を諦観しているような方たちではないからな。近く行動を起こすことは間違いないし、『当該艦』の方も一日の間、こちらが何の動きも無いようでは流石に何らかの接触を図ろうとするだろう」

参謀たちの多くはそう上手くいくものか、と疑問の表情を浮かべたものの、果たして伊藤の読みは正しく的中することになるのだっ

た。

士官室で昼食を済ませ、部屋に戻ってきた楓は非常に機嫌が良かった。

なぜならば、本物のF-22やF-2、そしてA-10を間近に見て、触り、主翼の上に乗ったり操縦席に座ったりと航空祭なんかは勿論、本職にでもならないければ滅多にできないことをやることが出来たからだ……流石に機体に抱きついたりする度胸はなかったが。

甲板上にはF-22、F-2が各2機、そしてA-10が11機。そして日立や小松など、日本を代表する重機が多数、さらに輸送用にかC-130輸送機が2機と至れり尽くせりの陣容だった。

上機嫌のまま椅子に座り、午前中の艦内各所からの報告を見ていた楓だったが、しかし段々と眉間にしわが寄っていく。報告の中には傍受した通信を解析した結果、戦艦『陸奥』、『伊勢』、『日向』、重巡『利根』を始めとする艦艇が東京湾口を封鎖しているというものもあったが、それはいい。仕方のないことだ。しかし楓がしわを寄せている原因はそれではない、いくつかの報告書にふざけているとしか思えない報告があったからだ。

例えば”通路を歩いていると、後ろに誰かいるような、尾行されているような気配を感じるが、誰もいない”や”鏡に少女の姿が映るが、振り返ってもそこには誰もいない”等、正直言って……とくに後者は白昼夢でも見たんじゃないのかと言いたい。

こんな与太話をいつたいたれが信じるのかと、呆れてしまう。こんなものは夏によくやるTVの心霊特集だけで十分だ。そう心の底から思いつつ、部屋を出る。断じて一人でいるのが怖くなったわけではない。顔が青ざめているの疲れがたまっているからだろう。

(……よくよく考えれば、この艦に乗っている人って死んだ人ばかり

第一章 第七節・『魔王の使徒』(後書き)

後日、追加いたします。

